

報告書概要集

Project Reports

2019

<https://www.toyotafound.or.jp/>

報告書概要集 2019年

Project Reports 2019

08
D15-R-0262

茂呂 雄二 Yuji Moro

格差社会において様々な交換をアクティベートする実践的な分配の正義
—共生人間科学に基づく社会の新たな価値創出—Activation of Exchanges by Local and Practical Distributive Justice in a Gap Widening Society:
Exploring new values for society based on convivial human science09
D15-R-0447

松井 三明 Mitsuaki Matsui

カンボジアにおける妊娠女性による医療の選択と決定への主体的な参画の促進
—母児の健康改善と不必要な医療介入の減少のために—Women's Participation to Decision Making Process of Medical Interventions during Labour in Cambodia:
Does it effectively reduce unnecessary interventions and improve maternal and neonatal health?10
D16-R-0032

セバスチャン・ルシュバリエ Sébastien Lechevalier

富の再分配、収入格差、社会的価値観、福祉制度に対する国ごとの考え方に関する考察

Revisiting Cross-national Variations in Preference for Redistribution:
Attitudes to inequalities, social beliefs, and welfare systems11
D16-R-0211

ウィリアム・アレン William Allen

「人の移動」を語り合うメッセージング
—変化する世界で移民や人の移動を語る新たなサービスの研究と創設—Messaging Mobility:
Exploring and creating new narratives about migration and human movement in a changing world12
D16-R-0238

山田 智恵里 Chieri Yamada

モンゴルのウラン鉱床近郊の住民主体被ばく対策活動
—有効な支援手法や活動強化要因の検証—Community Initiative of Activities for Preparing against Radiation Exposure in the Vicinity of a Uranium Mine
in Mongolia: An effectiveness study of assisting approaches and influential factors13
D16-R-0242

アンソニー・エリオット Anthony Elliott

高齢者向け介護ロボットの検証
—テクノロジーを利用した高齢者介護と福祉の実現に向けて—Assessment of Socially Assistive Robotics in Elderly Care:
Toward technologically integrated aged care and well-being in Japan and Australia14
D16-R-0256

当山 昌直 Masanao Toyama

消失の危機にある琉球の生物文化の記録保存から「生物文化遺産」創出の道を開く

Revitalizing the Endangered Biocultural Heritage of the Ryukyus, a Linguistic, Cultural, and Biological Hot
Spot of Extinction15
D16-R-0286

中山 幹康 Mikiyasu Nakayama

太平洋島嶼国からの気候変動難民が移転先で生活を円滑に再建するための施策
—難民とホストコミュニティ住民の融和に向けて—Measures for Smooth Livelihood Re-establishment of Climate Refugees from Island States in the Pacific:
Towards harmonization of climate refugees and the residents of host community16
D16-R-0404

木村 豊 Yutaka Kimura

戦争災害前後の日常生活の記憶継承に向けたアクションリサーチの実践的研究
Living with the Bomb: A-bomb and air-raid survivor memories and their daily lives17
D16-R-0611

由井 秀樹 Hideki Yui

母子保健における「標準化像」の形成過程に関する歴史的研究

A Historical Study on the Construction of a Standardized Image in Maternal and Child Health

18
D16-R-0647

サンドラ・マニユエル Sandra Manuel

モザンビークの料理史
—郷土料理のレシピとモザンビークの伝統文化—

Cooking History: Food recipes and heritage in Mozambique

19
D16-R-0661

蓮行 Rengyou

地域社会における多世代共創型演劇ワークショップによる効果の総合的・定量的評価

Comprehensive and Quantitative Evaluation of the Effect of Theater Workshop Targetting Multi-generation in the
Community20
D16-R-0718

フリアン・サラサール Julián Salazar

ディアギタ先住民社会の持続可能な開発戦略
—アンデス東南地域における文化遺産の調査および保護—Sustainable Development Strategies for Native American Diaguita Communities:
Cultural heritage research and protection in the Eastern South Andes, Argentina21
D16-R-0736

木場 紗綾 Saya Kiba

東南アジアにおけるコミュニティ・ポリシングの実践から学ぶ
—治安改善および警察改革へのインパクトの検討—

Community Policing in Southeast Asia: Assessing the impact on community security and police reform

22
D16-R-0836

池崎 澄江 Sumie Ikezaki

高齢者施設のエンドオブライフケアに関する日韓泰国際比較研究
—アジア型教育プログラムの開発に向けて—A Multi-country Comparative Study on End-of-life Care in Residential Care Facilities for Older People in
Japan, Korea, and Thailand: Towards developing an Asia-oriented educational program

26

D16-R-0083

ファルハナ・フェルドゥース Farhana Ferdous

環境デザインと健康

— 認知症患者のケア施設において環境デザインが果たす役割 —

Positive Health Outcomes by Environmental Design:

The role of spatial configuration in designing physical environment for people experiencing dementia

27

D16-R-0176

鈴木 愛 Ai Suzuki

Bangladesh 北東部の湿地におけるスナドリネコと人と軋轢緩和に関する研究

— 軋轢の基礎調査と軋轢緩和における住民参加型調査の可能性 —

Mitigation of Conflict between Local Community and Fishing Cats in Hail Hanor, Northeastern Bangladesh:
Interdisciplinary survey on conflict and possibility of participatory research in conflict mitigation

28

D16-R-0243

エヴァン・エリース・イーストン - カラブリア Evan Elise Easton-Calabria

「お荷物」から「恩恵をもたらす人びと」へ

— カンパラとベルリンにおける難民主導型人道支援の事例 —

From "Burdens" to "Benefits": Exploring refugee-led humanitarian assistance in Kampala and Berlin

29

D16-R-0320

牧野 冬生 Fuyuki Makino

カンボジアにおける「慰霊の空間」と負の記憶の継承儀礼に関する研究

— 「負の出来事の当事者性」の把握とアクティブデータベースの構築 —

The Study of Transferring Events of Negative Memories at the Public and Local Memorial Spaces in Cambodia:
Recognition of "the positionality of negative events" and conducting the formation of an active database

30

D16-R-0341

高村 加珠恵 Kazue Takamura

日本とカナダにおける外国人収容の実態とその人権擁護

— 両国間の比較分析 —

Ethnography of Immigration Detention and Migrant Advocacy in Japan and Canada:
A comparative analysis of civil society in illiberal and liberal immigration regimes

31

D16-R-0344

澤崎 賢一 Kenichi Sawazaki

「暮らしの目線」に見るフィールド研究の感性

— 映像メディアを活かす超学際研究の表現形の探究 —

Senses of Field Studies Standing on Peoples' Livelihood:

The search for phenotype of interdisciplinary research to take advantage of the video media

32

D16-R-0408

ヨー・カー・シー Yeoh Kar See

BRCA 遺伝子変異を持つ女性の乳がん発症を防ぐための意思決定方法に

関する新しい価値の考察

Exploring a New Value of Shared Decision-making for Prevention of Breast Cancer in Women with BRCA
Gene Mutations

33

D16-R-0424

今井 友樹 Tomoki Imai

自然と人の中にある「境界」をめぐる

— 心意伝承に新たな可能性を拓く —

On the "Boundary" that Lies between Nature and Human:
To open up new possibilities for "image folklore"

34

D16-R-0543

竹原 健二 Kenji Takehara

「イクメン」はわが国の父親のありようの理想像といえるのか

— 「イクメンブーム」がもたらした影響とそれにより失った何かを問い直す —

Should "Ikumen" be Ideal Model of Fathers in Japan?:

The effect of "ikumen" boom and something that we lost by the boom

35

D16-R-0576

平山 亮 Ryo Hirayama

性的マイノリティとして老いること

— 多様な生 / 性を受け容れる高齢社会の実現に向けて —

How Sexual Minorities Experience Aging:

Identifying and tackling challenges toward an inclusive aged society

36

D16-R-0760

新保 奈穂美 Naomi Shimpō

多文化共生型コミュニティガーデンの社会実装に向けた実証研究

An Empirical Study on Community Gardens as a Step toward Multicultural Inclusive Societies

37

D16-R-0798

岡部 正義 Masayoshi Okabe

教育開発と「逆向きジェンダーギャップ」に関する社会経済学的研究

— フィリピンの事例 —

A Socioeconomic Analysis on Reversed Gender Disparity in Education from Development Studies
Perspective: A case from the Philippines

38

D16-R-0799

西 麻衣子 Maiko Nishi

農村景観の多層的ガバナンス

— 日本の農地賃借における価値観の役割 —

Multi-level Governance of Agricultural Landscapes:

Role of value perspective on farmland tenancy arrangements in Japan

39

D16-R-0806

陳 愛国 Aiguo Chen

水環境の再生・保全における地域住民主体型の推進体制の構築に関する

日中比較研究

A Comparative Study on the Bottom-up Initiatives by Local Citizens in Promoting Water Environment

Utilization and Preservation in Japan and China

40

D16-R-0820

島田 千穂 Chiho Shimada

治療優位の価値の再考

— 高齢者の急性期医療の決定に伴う医療者のジレンマから —

Dilemmas for Medical Professionals in Determining the Course of Care for Oldest-Old Patients:

Reconsidering "cure-oriented" values in the realm of medicine

42・43 成果物紹介 Project Outputs





A 共同研究助成 Joint Research Grants



A 茂呂 雄二 Yuji Moro

筑波大学人間系 教授
Professor, Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba



格差社会において様々な交換をアクティベートする実践的な分配の正義 —共生人間科学に基づく社会の新たな価値創出—

Activation of Exchanges by Local and Practical Distributive Justice in a Gap Widening Society:
Exploring new values for society based on convivial human science

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 6,500,000 円 yen

現在、ますます拡大する経済格差は、社会的な不和や人々の未来への不安をもたらしている。なかでも子どもと若者への影響はきわめて大きい。より深刻なのは、社会的で文化的な資本の分配の偏りが作り出す、格差と不平等である。本プロジェクトでは、この分配の不公平を少しでも平準化するためには、どのような介入実践が可能なのかについて、パフォーマンス心理学と交換（ギブとゲットの弁証法）の考え方に基づいて、貧困や格差に曝され学校や就労で苦戦している子ども達ならびに若者への支援実践を展開した。また、この実践の展開過程を社会物質的アレンジメント研究の視点から精密記述した。

本プロジェクトが依拠するパフォーマンス心理学とは、1980年代から展開されてきた状況的認知論あるいは状況的学習研究の現在の到達点である。状況論は、従来の個体内部に閉じた心の営みの捉え方を批判して、それを社会的文化的プロセスとして捉える考え方である。本プロジェクトでは、まずパフォーマンス心理学の整備を行った。パフォーマンス概念の理論的特徴の解明と咀嚼を進めることで、パフォーマンス概念が、これまでにやったことのないことにチャレンジすることであり、チャレンジを可能にする環境としてグループ、アンサンブル、コミュニティを、参加者が共同製作する過程で人々は成長し発達すると考える、学術トレンドがパフォーマンス心理学であることを明らかにした。次いでパフォーマンス・アプローチを交換という視点から、さらに先鋭化して、パフォーマンス心理学の深化・拡張を図った。発達の環境とは、グループ、アンサンブル、コミュニティのメンバー同士が互いにギブ（贈与）しあうことだという交換仮説に基づいて、交換論でパフォーマンス心理学の拡張を試みた。

以上の方法論に基づいて、(1)東京都足立区の主婦等が運営する子ども支援団体（2団体）とこの団体周辺に出入りする貧困の子ども達、(2)茨城県西部のサポステ事業者とこれらの団体に入出入りする就労に苦戦する若者達を対象にして、現地でのフィールド研究を行ない、両地域の子どもの達ならびに若者達を取り囲む、社会物質的で心理文化的なアレンジメントの特徴を明らかにした。そして、その特徴を考慮しながら、介入研究を行ない、どのようにしたら、これらの子ども達・若者達に、新しい活動の形態を経験させることができるのかを検討した。介入研究のうち、(1)については、2016年10月から、2017年1月までの期間、「タレントショーづくり」を考案し実施した。これはステージ上でダンスや歌などの特技を披露するイベントであるが、企画・運営・発表の過程で「専門性を持つ大人」を必要とする場面をつくることができ、この場面において文化社会資本の交換が実現できると考えた。「専門性を持つ大人」との交流は、前述のフィールド調査ならびに質問紙調査から、当該地域には様々なタイプの子どもの支援が確認できたが、貧困の子ども支援活動は、学校外での子ども達への支援に関わり始めた「専門性を持つ大人」を十分に活用できていないことが示されたからである。(2)については、2016年12月から2019年6月間での期間において、「若者たちの固定化した生の在り方と遊ぶこと」を目指した共同活動を組織した。上記フィールドワークで得た、茨城県西若者サポートステーション代表の「サポステに来る若者の多くは、何か新しい状況に直面した時、まずできない理由を探し、それにトライしない自分を納得させているように感じる」とのサポステ事業者の発言にあるように、固定化した生の限界を突破する、新しいパフォーマンスの開拓が重要だと考えたからである。



A 松井 三明 Mitsuaki Matsui

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科 准教授
Associate Professor, School of Tropical Medicine and Global Health, Nagasaki University



カンボジアにおける妊娠女性による医療の選択と決定への主体的な参画の促進 —母児の健康改善と不必要な医療介入の減少のために—

Women's Participation to Decision Making Process of Medical Interventions during Labour in Cambodia:
Does it effectively reduce unnecessary interventions and improve maternal and neonatal health?

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 6,200,000 円 yen

このプロジェクトは、カンボジアの妊娠女性が出産の際に行われる医療の決定に主体的に参画できるようになることを目標として実施した。そのために妊娠中の女性に対して医療サービスの内容および医療を受ける際の権利と義務を伝えること、また医療従事者に対して女性の尊厳を大切にしようとして不必要な医療の減少と母児の健康向上に結びつくための科学的根拠に基づいた医療の実践を定着させることの2点に取り組んだ。その背景には、多くの国において妊娠・出産の際に過度とも言える医療行為が行われ、女性は身体的・精神的苦痛を受けていることがある。同時に女性自身はその状況を「しかたないこと」として捉えている。それは医療の選択に参画することができないことが大きな理由と考えられる。

カンボジア保健省国立母子保健センターが作成した“Guidelines to Individualized Midwifery Care for Normal Pregnancy and Birth”（正常出産と出生に対する個別化助産ケア実践ガイド）を基礎としてプロジェクトを実施した。対象地域をカンボジア首都プノンペン市内の公立保健センターとした。その理由は、カンボジアでの出産は90%以上が施設で行われていること、首都では比較的貧困層が公的医療施設を利用していることであった。

女性に対する情報提供は、ガイドに記載された「出産を理解してもらうために必要なQ&A」から抽出し、それを啓発資料としてポスターを作成した。当初は個別に配付できるパンフレットとして作成を行う予定であったが十分な予算を確保することができなかったため、医療施設に貼付して妊婦健診の際に行われる母親学級で用いることができる教育ツールとした。これは後述する6カ所の医療施設で行った。

医療従事者を対象に正常出産時に提供すべきケアの実践に関する知識の確認を行った。分娩が月に平均20件以上ある17施設から分娩介助を行っている101名の助産師らを対象とした。正常出産に関する知識は平均54.1%と当初の想定より極めて低く、知識の改善が喫緊の課題と考えプロジェクト当初の2年間弱を上述ガイドに基づいた研修～特に分娩経過中のケアの必要性和実践に費やすこととなった。この研修対象は、分娩数が月間30件以上ある保健センター6カ所に絞って実施した。また医療従事者に対して必要な介入を検討するために質的調査を行ったところ、前述ガイドに記載されている個別化ケア実践のためには医療施設と機材の脆弱性が指摘されたため、施設のインベントリー調査を並行して行った。しかし、このプロジェクトでは施設そのもの、および医療機材への直接的な介入は行わず、改善案をプノンペン市保健局に提言するにとどめた。

女性に対する啓発、医療従事者に対する研修の効果を測定するために、啓発・研修実施前後における科学的根拠に基づく分娩時ケアの実践状況と、出生時の新生児の状態の変化を測定した。その結果、分娩経過中の胎児の状態観察は研修実施後に若干の改善をみたが、残念ながら統計学的に有意な差は得られなかった。また子どもの状態を測定するために臍帯血を採取しpHの研修実施前後での変化を測定したが有意な差は認められなかった。

このプロジェクトでの反省点は女性に対する啓発が不十分であった可能性である。妊娠中に、さらに個別性の高い啓発活動を行うことで、今後さらに妊娠・出産する女性が、より分娩時に必要なケアについて知識を持ち、医療従事者と適切な対話を行えるようになることが必要と考えた。



セバスチャン・ルシュバリエ Sébastien Lechevalier

フランス国立社会科学高等研究院日仏財団 教授
 Professor, Fondation France-Japon de l'École des hautes études en sciences sociales (EHESS)



富の再分配、収入格差、社会的価値観、福祉制度に対する
 国ごとの考え方に関する考察

Revisiting Cross-national Variations in Preference for Redistribution: Attitudes to inequalities, social beliefs, and welfare systems

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 4,000,000 円 yen

Our project aimed at dealing with the issue of inequalities from an original perspective that may contribute to the emergence of new values for the society. The increase of inequalities during the last three last decades is now a robust stylized fact. The identification of its causes is more controversial.

Although there may be universal mechanisms – such as the one identified by T. Piketty in his famous book – two facts show that there are others that are not universal: 1) the increase is not the same across countries; 2) its perception differs across countries and is paradoxical as it is the most important in Europe, although inequalities have increased the least. Our goal was to explain these two facts by reference to different values across three regions. They are certainly deeply rooted in different cultures. However, our initial hypothesis was that more than “culture” (which is rarely well defined by economists), social, economic and political history (and, in particular, the historical building of welfare systems) matters. If these values are partly historically determined, it means that they can change. In short, our purpose is to promote not a convergence between these three regions with so different backgrounds but rather the circulation of ideas through a fruitful dialogue that takes into account our differences. This is a key condition for the emergence of “new values for society” as it has been the case in the postwar period for the human rights.

In order to reach these objectives, we have conducted a joint research scheme with the goal to quantify the differences between the US, Europe and Japan in term of preferences for redistribution, social values, average determinants and differences across different socio-economic groups.

A major result that emerged from our perspective is that analyzing the preference for redistribution requires to mobilize various indicators, as there is a high risk of confusion when one focuses on a single indicator. Moreover, we have connected two patterns regarding redistribution - facts and beliefs - in challenging the idea that there are only two worlds, across the Atlantic. We have defined the Japanese pattern, which does correspond nor to the American dream neither to the “European pessimism”. Finally, our analysis has tried to explain the origin of different social values across the three regions, especially by analyzing the effect of welfare system constructions and of migration policies on social values.



ウィリアム・アレン William Allen

オクスフォード大学移民・政策・社会センター リサーチオフィサー
 Research Officer, Centre on Migration, Policy, and Society, University of Oxford



「人の移動」を語り合うメッセージング
 ー変化する世界で移民や人の移動を語る新たなサービスの研究と創設ー

Messaging Mobility:
 Exploring and creating new narratives about migration and human movement in a changing world

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 6,400,000 円 yen

Migration and human mobility remain high on international political, policy, and public agendas. The issue has, in part, contributed to major political shifts in Europe, North America, and beyond. Given such global salience, our project ‘Messaging Migration’ aimed to address how the issue is communicated through media, and to explore alternative approaches based in the creative arts. We intentionally situated our research as an inter- and multi-disciplinary enterprise, involving (among other approaches) political science, sociology, migration studies, linguistics, and drama. Not only did we intend to make contributions to substantive questions about which kinds of messages can impact public discussion, but we also wanted our project to engage with deeper issues about which kinds of values might inform those discussions in the first place. Moreover, we wanted to explore different techniques and ways of expressing our findings to wider audiences beyond the conventional formats of academic journal articles—although we acknowledge how these remain important venues for scholarship and researchers’ professional development.

As such, we posed two seemingly simple questions in our original proposal: (1) What would new, ‘effective’ narratives on migration look like, and (2) what values, techniques, or approaches would they invoke? On both questions, our project generated findings and evidence that support some (at this point) tentative conclusions. More broadly, a key message that emerges from our work is that ‘effectiveness’—and how to achieve it—depends on the objectives and capabilities of messengers, as well as the perspectives of audiences. Therefore, in line with recent communication scholarship, our results do not lead us to advocate for a ‘magic bullet’ approach to talking about migration: one solution will not fit all situations. Rather, ‘effective’ messaging in such polarised and politically fragmented times will likely involve paying closer attention to how, for whom, and in which circumstances information matters for broader public debates.



Photo 1 (dated September 2017)
 Is Perceiving Believing? An Interactive, Multisensory Experience Based on Media Analysis, Held as Part of the Curiosity Carnival at the University of Oxford, 2017

Photo 2 (dated April 2018)
 Sharing Learning about How to Engage with the Public Using the Creative Arts, at an Impact Conference at the University of Oxford, 2018

山田 智恵里 Chieri Yamada

福島県立医科大学大学院医学研究科 教授
Professor, School of Graduate Education, Fukushima Medical University



モンゴルのウラン鉱床近郊の住民被ばく対策活動 —有効な支援手法や活動強化要因の検証—

Community Initiative of Activities for Preparing against Radiation Exposure in the Vicinity of a Uranium Mine in Mongolia: An effectiveness study of assisting approaches and influential factors

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 6,200,000 円 yen

1. プロジェクト概要

東日本大震災に続いた福島原子力発電所事故後福島県をはじめ多くの地で人々は被ばく被害に不安を募らせた。被ばく災害は世界中どこでも起こりうるため、より多くの人々が放射線理解と防災に備える体制を整えるためのアクションリサーチを実施した。対象はモンゴル国ドルノゴビ県サインシャンド町ズーンバヤン地区で今後採掘が開始されるウラン鉱床がある。

2017年6月放射線と被ばくに関する知識を得て自ら健康を守る住民主体の活動を開始した。地域としての防災・緊急事態へのレジリエンス能力を高めるためにどのような介入が有効であるか、確認しつつ展開するアクションリサーチを行った。県保健局、県環境モニタリング局、地区役場、地区病院と連携した。

住民への動機づけとして成人と小児の健康診断、地区内の空間放射線線量測定を行い、それらの結果を住民に報告した。ズーンバヤン病院院長等3名を本邦に招へいし防災、被ばく、健康調査、リスクコミュニケーション等研修を行った。帰国後3名はファンリテーターとなり、地区内のヘルスボランティア、看護師、教員、学生等によるワーキンググループを編成し、四半期ごとに会合を持つことにした。グループメンバーは健康、災害と防災、放射線等について学び、緊急時要援護者確認やリスクアセスメント等調べて話し合いを行った。会合後にメンバーは毎回受け持ち地域の個別訪問により得た知識や情報を住民へ伝達した。

2018年9月には役場と病院共催で住民フェアを開き、健康と放射線、ファーストエイドや緊急時対応について説明や話し合いの場が設けられた。2019年1月には地区独自の防災冊子が作成され、ワーキンググループメンバーを通して説明と共に全戸へ配布された。

住民主体活動の導入は順調に進み、地域としての防災・緊急時対応力も蓄積されてきた。健康診断と放射線線量測定の実施、報告は住民の健康と被ばくへの関心を高めた。県、地区の全面的協力が得られたこと、数10年前から戸別訪問によるヘルスプロモーション活動が活発であったことも強化要因であった。当研究で地元人材を育成し教材開発スキルを修得させ、ボランティアや病院職員によるグループワークとその結果の住民への伝達、徐々に活動の主体を住民へ移動したこと、住民による定期的放射線線量測定などが活動推進に有効であった。今後もズーンバヤン地区の支援を継続し、全国へも拡大したいと考えているモンゴル側を支援する。

2. 成果物

ズーンバヤン地区住民への配布用リーフレット3種類(健康診断結果の見方と健康知識、放射線の基礎的知識、リスクコミュニケーションとは)全戸配布、防災冊子1冊(ズーンバヤン地区用)全戸配布

論文(査読有): 1) 山田智恵里, Bolormaa Tsedendamba, 堀内輝子, 片桐和子, 末永カツ子, Enkhtuya Palam. (2018). モンゴルでの被ばく対策住民活動の導入: 介入前調査報告. 日本国際看護学会誌, 1(1): 25-34. 2) Yasutaka Omori, Atsuyuki Sorimachi, Manlaijav Gun-Aajav, Nyamdavaa Enkhgerel, Galnemekh Oyunbolor, Enkhtuya Palam and Chieri Yamada. Elevation of gamma dose rate by construction of the Asian highway 3 (ah3) between Ulaanbaatar and Sainshand, Mongolia. (2018). Radiation Protection Dosimetry, 1-8. doi:10.1093/rpd/ncy173. 3) Yasutaka Omori, Atsuyuki Sorimachi, Manlaijav Gun-Aajav, Nyamdavaa Enkhgere, Ganbat Munkherdene, Galnemekh Oyunbolor Amarbileg Shajibalidir, Enkhtuya Palam, Chieri Yamada. (2019). Gamma dose rate distribution in the Unegt subbasin, a uranium deposit area of Dornogobi Province, southeastern Mongolia. Journal of Environmental Radioactivity: under review. シンポジウム発表2回、学会発表3回、その他1回



アンソニー・エリオット Anthony Elliott

南オーストラリア大学 教授
Research Professor, University of South Australia



高齢者向け介護ロボットの検証 —テクノロジーを利用した高齢者介護と福祉の実現に向けて—

Assessment of Socially Assistive Robotics in Elderly Care:
Toward technologically integrated aged care and well-being in Japan and Australia

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 5,000,000 円 yen

<Summary>

Responding to the global challenge of population ageing “socially assistive robotics” are being incorporated into new models of care to meet rising expectations regarding aged wellbeing and contain escalating costs. This study was designed to yield new sociological insights about how robotic technologies might transform the lives of elderly people in Japan, and the opportunities and risks entailed.

Specifically investigated were the cultural perceptions of elderly people held by developers of robots for aged care in Japan.

Stage 1: Review of engineering and social science literature on ageing processes, elderly people, and care.

The engineering literature tended to reproduce stylized views of ageing/elderly entailing illness, frailty, loneliness and passivity in the receipt of care. Care was treated in a disaggregated fashion. In the social science literature elderly people were actively engaged with technologies, and care approached holistically.

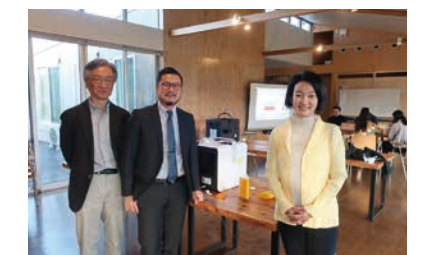
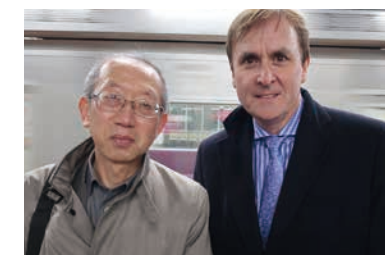
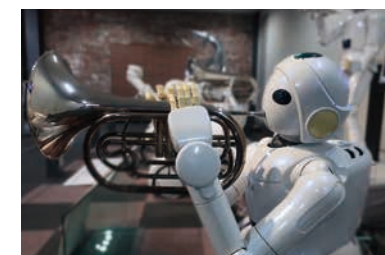
Stage 2: In-depth interviews conducted in Japan during March 2018 (Tokyo, Nagoya) and October 2019 (Kanto, Kansei). A smaller number of Australian interviews conducted between November 2018 and February 2019. Subjects were senior and junior developers of robotic applications for use in aged care.

<Key findings>

1. Ageing essentialized (defining characteristics of the ageing population drawn from generic demographic categories rather than engagement with older people);
2. Simplistic assumptions and stereotypes about ageing people commonplace;
3. developers strongly techno-centric, believed initially skeptical elderly people would eventually adopt technologies as beneficial for their care-needs;
4. A smaller proportion of subjects appreciated the diversity of the aged population and ageing process, and the need to engage recipients of care.

<Outputs>

Project findings reported in Anthony Elliott's recent book “The Culture of AI: Everyday Life and the Digital Revolution” (2019, Routledge; a Japanese translation will be published by the Akashi Publishing Company in 2020). One scholarly article, “The development of autonomous aged care technologies in Japan” (submitted to Critical Asian Studies). One book chapter “Technogenarians: Ageing and Robotic Care”, currently being prepared for inclusion in the Routledge Social Science Handbook of AI, published by Routledge. Project findings reported at invited presentations in Japan, Australia, Canada and Munich.



当山 昌直 Masanao Toyama

沖縄大学地域研究所 特別研究員
Appointed Researcher, The Institute of Regional Study, Okinawa University



消失の危機にある琉球の生物文化の記録保存から 「生物文化遺産」創出の道を開く

Revitalizing the Endangered Biocultural Heritage of the Ryukyus, a Linguistic, Cultural, and Biological Hot Spot of Extinction

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 5,400,000 円 yen

概要

琉球列島の島人は古来自然に寄り添い自然とともに暮らしてきた。そのために身の回りの動植物や地形などに地方名をつけて利用し、さらにそれぞれの特性を理解して暮らしに活かす先祖代々の知識と知恵が引き継がれてきた。しかし、琉球列島の自然環境は、開発や第一次産業の衰退等の社会変化により大きく姿を変えたと同時に、語り部の高齢化や過疎化などにより、それまで身近な自然を生活の中に多様な形で利用していた文化も、急速に失われつつある。

本研究では、このような文化の危機的な状況に向き合ってきた地域の人々とともに、消失の危機にある琉球列島各地に残る「生物文化多様性」の記録に取り組み、次世代への継承のあり方を探ることを目的とする。また、地域の特徴やその持つ意味を地域の人々とともに明らかにし、地域についての気づきや興味、さらには深い理解にもとづく自信と希望を育てたい。これを「地域の生物文化遺産」データベースとして公開し、地域を超えた伝統的な知識と知恵の継承と交流の場の創出を目指す。実施内容や方法については、以下のとおりである。

奄美・沖縄・宮古・八重山諸島の各地において、動植物の方言やその利用等について聞き取りや映像により調査・記録し、データベースを作成する。沖縄島に取りまとめの本部を置き、代表とコアメンバーで、調査の計画、調整、進捗状況のチェックなどを行い、短期間で効果的な調査が実施できるように行う。奄美大島、宮古島、石垣島に地元の調査員を置き、効率的に広範囲の調査が行えるようにする。また、沖縄島からの調査員と一緒に合同調査なども行う。地元の教育委員会、市町村史編纂室、博物館・資料館等と連携を取りながら調査を実施する。また、学校現場や社会教育の主体とともに調査後の地元への成果の還元や普及に取り組める体制をつくる。

成果

調査活動は、沖縄島の本部メンバーと各地の調査員に分けられる。宮古の池間島と八重山の石垣島で開催されたアダンサミットには地域をまたがって参加した。一方、市町村史編纂事務局などの機関や地元の方々との連携によって多くの話者からお話を聞くことができた。また、与論島を合同調査地域として調査を行い、地元との研究交流を実施した。成果の一環として、以下に示すシンポジウムと報告会を開催した。

◆シンポジウム：人と自然が織りなす世界——奄美沖縄の生物文化

日時：2018年11月23日(金)午後2時～午後5時半

場所：沖縄県立博物館・美術館(2階講堂) 入場無料

主催：生物文化遺産プロジェクトチーム

◆報告会：ユネスコの生物文化をかえりみる

日時：2018年11月25日(日)午後2時半～5時半

場所：与論町中央公民館(2階大ホール) 入場無料

主催：生物文化遺産プロジェクトチーム

後援：与論町教育委員会



中山 幹康 Mikiyasu Nakayama

東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授
Professor, Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo



太平洋島嶼国からの気候変動難民が移転先で生活を円滑に再建するための施策 —難民とホストコミュニティ住民の融和に向けて—

Measures for Smooth Livelihood Re-establishment of Climate Refugees from Island States in the Pacific: Towards harmonization of climate refugees and the residents of host community

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 5,000,000 円 yen

国際移住機関(IOM)は2050年までに世界で2500万人から10億人が所謂「気候変動難民」になると予想している。国連気候変動に関する政府間パネル(IPCC)は2018年に発刊した報告書で気候変動による1.5度の気温上昇は54から97cmの、2.0度の気温上昇は63から112cmの海水位上昇を招くと予想した。キリバスとマーシャル諸島(RMI)は全土が標高が低い環礁であり、海水位上昇による「気候移民」が生じると推定されている。

2017年5月から2019年4月に掛けて、国際共同研究「太平洋島嶼国からの気候変動難民が移転先で生活を円滑に再建するための施策」が5か国(日本、米国、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦、キリバス)から約20名の研究者の参加を得て実施された。研究の目的は、これらの環礁国から国外への移転者が、移転先の新たな環境の下で円滑に生活を再建することは過去に於いて可能であったか、将来に於いて可能であるか、を明らかにすることである。

本研究ではRMIとキリバスを本研究では移転者の「発生源」とした。アメリカ合衆国(USA)とフィジーを移転者の「目的地」とした。また、環礁国ではないミクロネシア連邦(FSM)からUSAへの移転者についても比較した。更に、ウィーン市(オーストリア)による移転者への取り組みも、太平洋諸国からの移転者への対応に有益な知見を得るために研究した。

RMI在住で移転を希望する短大生の内、65%が移転を希望する理由の最上位に教育を挙げた。就業(15%)、医療健康(8%)、家族(7%)、気候変動(3%)、海面上昇(2%)がそれに続いた。国土の殆どが火山島のFSMでも短大生の4%は移転を希望する理由の最上位に気候変動を挙げた。他方キリバスでは13.7%の大学生が、最上位に海面上昇を挙げた。同じ環礁国でもキリバスに住む大学生の方が気候変動を(RMI在住の短大生に比して)大きな脅威と捉えていると考えられる。RMI在住の有識者は学生が海外への移転を希望する理由は的確に認識していたが、教育が占める割合の高さを過小評価していた。

RMIからスプリングデール市(米国、アーカンソー州)への移転者が挙げた主な移転の理由は、家族(36%)、就業(26%)、教育(23%)、医療健康(15%)であり、気候変動は主要な理由には含まれなかった。しかし35%の移転者は、移転を決意した理由の一つとして気候変動を挙げ、45%の移転者は気候変動を理由として故国には戻らないと決めている。

スプリングデールでは就業しているマーシャル人移転者の89%は鶏肉工場に職を得ている。高度の技量を要しない職種に就くマーシャル人移転者が多いという事実は、彼等が高い教育を受けていないことを物語っている。移転者の多くは短時間の内に移転することを決めており、42%は「突然」移転し、30%は1-3か月の21%は3か月以上の準備期間があった。移転者の多くは移転先での新生活への準備不足を後悔していた。

FSMからセイラムとポートランド(米国、オレゴン州)への移転者の49%は教育、同じく49%が就業、33%が家庭、31%が医療健康、8%が気候変動を主な移転の理由に挙げた(註：重複回答あり)。移転者の59%は1か月未満の準備期間で移転した。彼等はホームヘルパー、精肉業、レジ係、医療事務、列車の運行管理、空港の係員、技術者、地域保健員、通訳など多彩な職業に就いている。移転者の15%は移転を決意した理由の一つに気候変動を挙げており、18%がFSMに帰還しない理由の一つとしている。明らかに、FSMからオレゴン州への移転者はRMIからアーカンソー州への移転者に比して、気候変動を大きな脅威としては捉えていない。

ウィーン市では心の問題を抱えた移転者への対応が秀でており、多くの心理療法士が家庭内暴力や鬱病に対応している。また、家族起因の問題には家族全員を収容する施設で対応している。同市の「移転者分散政策」は、同じ民族だけで集団が構成される場合に起こりやすい、社会あるいは文化に起因する心の問題を回避する効用を有している。



木村 豊 Yutaka Kimura

日本学術振興会 特別研究員 -PD
Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science



戦争災害前後の日常生活の記憶継承に向けたアクションリサーチの実践的研究
Living with the Bomb: A-bomb and air-raid survivor memories and their daily lives

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 3,800,000 円 yen

〈プロジェクト概要〉

本プロジェクトでは、戦争災害の記憶の継承をめぐる問題を「日常」という側面から捉え直すとともに、戦争災害の記憶が持つ普遍的な価値を探求し、新しい戦争の記憶継承のあり方を提示することを目的としている。

戦後 70 年が経過する中で、戦争災害の記憶を語り継ぐ活動が盛んに進められるとともに、そうした活動を対象とした研究が数多くなされてきたが、その中には被災当日の体験に重きが置かれ、戦争災害の非日常性が強調されてきた。それでも、戦争災害を生き抜いた人びとは連続した日常生活（防空一戦災一占領一復興）の中で戦争災害を経験している。

また、焼け跡の写真や映像などを含む戦争災害に関わる歴史的なビジュアル資料は数多く存在し、その一部は日米の文書館などに保存されているが、いまだに撮影場所などの詳細が不明なままのものも多く、また、戦争災害を経験した人びとがそれに容易にアクセスできないため、戦争災害の記憶を語り継ぐ活動の中でもほとんど活用されていない。

そのような問題意識のもと、本プロジェクトでは、アクションリサーチの考えにもとづき、主に以下3点の調査研究を進めた。

(1) ビジュアル資料調査

アメリカのナショナルアーカイブスを中心に日米の文書館において調査を行い、日本の戦争災害前後の日常生活に関わるビジュアル資料を収集した。特に、戦争災害で被災した地域で戦時・占領期に撮影された写真・映像資料を中心に調査を行い、本助成期間を通して、写真資料 2000 枚以上、映像資料 500 本以上、そして、それらに関連する文書資料を収集した。

(2) ビジュアル資料にもとづく現地調査

上記のビジュアル資料をもとに、東京・広島を中心に、群馬・埼玉・神奈川・長野・愛知・三重・大阪・長崎において現地でのフィールドワーク調査を行なった。ビジュアル資料を持ってそれが撮影された現地を歩きながら、写真・映像に写されているものについての検証を行うとともに、戦争災害を経験した人を中心に、長年その地に居住している人びとに対して、それらのビジュアル資料を提示しながら聞き取り調査を行った。

(3) ビジュアル資料展示型調査

東京と広島において、上記のビジュアル資料を用いて、写真・映像展示型の調査を行なった。各地域の公共的な場所（広島：2018年8月5・6日平和記念公園・東京：2019年3月16・17日神楽坂スペースAOM、2019年3月30・31日八重洲ブックセンター本店）において、それぞれの地域の戦争災害前後の日常生活に関わるビジュアル資料を展示するとともに、その観覧者に対して簡易なアンケート調査・聞き取り調査を行った。

これらの調査を通して得られた各種資料（写真・映像・文書・音声など）をとりまとめて、戦争災害前後の連続した日常生活という側面から戦争災害の記憶について再検討するとともに、「日常」という視点を取り入れた新しい戦争の記憶継承のあり方について考察した。

〈成果物〉 本プロジェクトの主な成果物は、以下の3点である。

①プロジェクトの中間報告として、公開研究会・まちあるきワークショップ「都市における戦争と日常の交点を探る」（2018年6月17日すみだ北斎美術館）を開催した。

②プロジェクト全体を通した成果報告として、写真・映像展示イベント・ギャラリートーク「日常へのまなざし—昭和20年代、進駐軍が見た日本の街角」（2019年3月16・17日神楽坂スペースAOM、2019年3月30・31日八重洲ブックセンター本店）を開催した。

③プロジェクトの研究成果をとりまとめた冊子『日常へのまなざし—戦争災害前後の記憶継承に向けたアクションリサーチの実践的研究』を作成した。また、日米の文書館において収集した写真・映像資料をアーカイブ化しインターネット上で公開する準備を進めた（近年中に公開予定）。



由井 秀樹 Hideki Yui

立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員
Senior Researcher, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University



母子保健における「標準化像」の形成過程に関する歴史的研究
A Historical Study on the Construction of a Standardized Image in Maternal and Child Health

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 4,100,000 円 yen

I. 研究内容の概要

本プロジェクトでは、これまでの母子保健が何を前提にし、いかなる規範を生成してきたのか、という面から近現代日本の母子保健の歴史を検討した。その際、特に社会科学系の研究でこれまで取りこぼされてきた、あるいは、研究が手薄な母子保健史のトピックに焦点をあて研究活動を行ってきた。

本プロジェクトが目指したトピックは、以下の通りである。すなわち、不妊対策、へき地の母子保健と乳児死亡、外国人母子への支援、出産への夫の関与、児童虐待、「奇形児」の出生、母子の一体化と国民の「質」の関係性である。

本プロジェクトの成果は、研究成果の社会への還元を意識した4回の市民講座とともに、個別の学会報告や論文に加えて、『トヨタ財団研究助成「母子保健の『標準化像』の形成過程に関する歴史的研究」報告書 母子保健史の間隙—母子保健は人々に何をもちたらしめてきたか』にまとめ、この「報告書」をもとに、日本保健医療学会第45回大会のラウンドテーブルディスカッション「母子保健の近現代—母子保健は何を前提にし、いかなる規範を生成してきたか」を企画し、発表した。「報告書」の構成は以下の通りである。

第1章 母子保健政策における不妊対策と「適正」な妊娠・出産年齢をめぐる近現代史（由井秀樹）

第2章 1950-60年代の岩手県における乳児死亡率低減と人工妊娠中絶（木村尚子）

第3章 1960-1970年代の青森県下北半島における母子保健の展開と地域社会

—へき地のお産をめぐる問題点と可能性—（木村尚子）

第4章 保育所・児童養護施設における外国人児童家庭の支援に関する調査研究から母子保健施策の整理へ（松島京）

第5章 夫の出産への立ち会いからみる出産介助の現代史（由井秀樹）

第6章 新聞における児童虐待記事と事件報道の推移

—2000年から2018年の「児童虐待」報道に関する『読売新聞』と『朝日新聞』の分析から—（笹谷絵里）

第7章 「奇形児」の出生をめぐる対応 —1920年代後半から1960年代の助産婦・産科医の立場に注目して—（伏見裕子）

第8章 日本の母子政策の歴史 —環境改善と遺伝的改善による「質の向上」に着目して—（笹谷絵里）

各々のトピックを繋げることで、(1) 母子の一体化、(2) 生殖の計画性、(3) 負担と（母子）保健体制の充実の引き換え、(4) 矯正と排除のせめぎ合い、(5) 逸脱者とみなされた存在の包摂のあり方、(6) 妊娠・出産・養育文化の相違、という論点のみえてきた。これらの論点は、今後、よりよい母子保健政策、実践のあり方を考えるための補助線となり得る。その意味で、社会の新たな価値を生成するための素地を提供しているといえる。

II. アウトプットに関する成果

論文等

伏見裕子「『奇形児』の出生をめぐる対応—1920年代後半から1960年代の助産婦・産科医の立場に注目して」『大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要』第52巻（2018年）。笹谷絵里「日本の母子保健政策の歴史—環境改善と遺伝的改善による「質の向上」に着目して」『徳島科学史雑誌』第37号（2018年）。伏見裕子「障害児の出生に人々はどう向き合ってきたのか」GLOBE 96（2019年）。由井秀樹「母子保健政策における不妊対策と家族形成をめぐる現代史」『福祉社会研究』第19号（2019年）。由井秀樹「現代社会における妊娠・出産の意味」『世界の児童と母性』第85号（2019年）。木村尚子「1950-60年代の岩手県における乳児死亡率低減と人工妊娠中絶」『広島修大論集』第65巻第1号（2019年）。

報告書

母子保健史プロジェクト編集・刊行『トヨタ財団研究助成「母子保健の『標準化像』の形成過程に関する歴史的研究」報告書 母子保健史の間隙—母子保健は人々に何をもちたらしめてきたか』2019年。



A サンドラ・マニエル Sandra Manuel

カレイドスコピオ研究所 助手
Research Associate, Kaleidoscopio Research Intitute, Mozambique



モザンビークの料理史
—郷土料理のレシピとモザンビークの伝統文化—
Cooking History: Food recipes and heritage in Mozambique

助成期間 Project Period : 1 years 助成金額 Grant Amount : 2,400,000 円 yen

The reasoning leading to this project is twofold. On the one hand, we have realised that the transmission of the history of the country, as well as stories from diverse communities and sociolinguistic groups, is done either through formal education or storytelling at these communities and groups. Such methods transmit two distinct types of knowledge, which do not always speak to each other. Our goal was to bring together both kinds of knowledge in creative ways. By focusing on the diversity of Mozambican cuisine, we aimed to create a cookbook co-produced with children through workshops in Maputo. Primary school pupils attended the workshops with the presence of researchers, a nutritionist, a storyteller, a photographer and local cuisine cooks in these specific case two women with knowledge of cooking techniques, ingredients and dishes from the diverse regions of Mozambique. In the workshops, the local cooks presented and described the ingredients, cooked and taught different dishes to young children. While the cooking was happening, the researchers of the project presented and discussed historical, ethnographic and nutritional facts about the ingredients and dishes being prepared with the primary school children participating in the workshop. During the process and after the meals in the workshop, children were invited to record their experiences and suggestions.

On the other hand, our objective is to contribute to the growing debate on food as a symbol of both an individual and a collective sense of identity and heritage in Africa and specifically in Mozambique (Cristovão 2005, Meneses 2009, Roletta 2004). Rather than focusing on the role of food in the processes of creation of nationhood through modernisation, we aim at apprehending the diversity of the cultural manifestations through food and its meaning to peoples' own experiences, sense of belonging and identity. Hence, our interest is to include in the cookbook a summary of the context, rituals and social dynamics associated with the selected dishes of Mozambican cuisine. Ultimately, this book will be a contribution to a better understanding of Mozambican living heritage by highlighting the place of food in different moments and dimensions of everyday life. In this, children played a paramount role as learners and co-producers of the cookbook.

Through the workshops we have compiled 12 recipes and have performed a nutritional evaluation of each of the recipes that include suggestions on how to prepare the recipes in ways that respond to more adequate nutritional needs. We have also compiled photographs of all the dishes cooked and from the interactions in the workshops. The archival work granted us historical data related to foodstuff, and food practice and fieldwork highlighted meanings and logic applied by different communities, ethnolinguistic groups and families regarding food. The final output of the project—a cooking book with historical and ethnographic material that contextualises the recipes selected—is still under production and soon to be published.



A 蓮行 Rengyou

劇団衛星 代表
Director, Eisei Theater Company



地域社会における多世代共創型演劇ワークショップによる効果の
総合的・定量的評価
Comprehensive and Quantitative Evaluation of the Effect of Theater Workshop Targetting
Multi-generation in the Community

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 5,800,000 円 yen

本研究は①多世代共創型演劇ワークショップの開発と実施、②参加者に対する心理・身体・社会的効果に関する量的・質的評価の2つの要素から構成された。まず、研究会において試行的に開発したワークショップを実施し、そのプログラムについて、各地域特性を予測、考慮し改善を行なった。つづいて、開発したワークショップを全国4箇所(京都市右京区・福井市。京都市下京区・土佐市)の介護施設において実施した。参加者は、ワークショップ実施場所である介護施設を利用する高齢者と施設スタッフ、近隣に住む成人や子ども20名程度であった。また、演劇ワークショップ実施前後の参加者の心理的・身体的変化を定量的に評価するため、参加者を対象として複数の尺度による質問紙調査を行った。演劇ワークショップは、集団創作のプロセスを通じて、参加者の多様な領域における知識・スキル、そしてモチベーションの向上が期待される手法である。このワークショップは、双方向的な交流と自発的なディスカッションを促す機能、対等な関係性における協働を促す機能を有しており、参加者の主体性や想像力の向上、コミュニケーション能力の養成、参加者相互に対する敬意の喚起に有効なツールとなる。子どもから現役世代、高齢者(介護者・被介護者を含む)までを対象に演劇ワークショップを実践することで、介護の現場においては介護者と被介護者間におけるコミュニケーションの円滑化と介護者の心理的負担軽減、地域社会においては異世代の他者を尊重する意識と互助的関係の再構築といった、福祉領域における効果が期待することができる。

プログラムの効果を検討するために、プログラムの事前・事後・遅延調査において測定された幸福度得点、自尊感情得点、コミュニケーション能力得点、共感性得点、ソーシャル・キャピタル得点をそれぞれ従属変数とする1要因分散分析を行なった。

本研究は演劇体験の効果について、ポジティブな影響を持ちうるであろう演劇の構成要素を推定し、その要素を用いて演劇プログラムを再構成するというような要素還元的な視点からではなく、演劇体験の全体性を重視し、比較的探索的な視点から、調査を試みた。また、多様な心理社会的スキル・知識・状態を測定する質問紙を使用しているが、各構成概念に対し演劇が影響を及ぼすに至る心理的メカニズムに関する詳細な仮定をおかず、調査を行った。

全体の傾向として、「参加者の年齢」と「過去の演劇体験の程度」の交互作用効果については一定のパターンがあった。より具体的にいえば、年齢が低い参加者においては、過去の演劇体験が多くなるほど、本プログラムへの参加に伴う各種資質・能力の伸びの程度が相対的に小さくなること、一方で、年齢が高い参加者においては、過去の演劇体験が多くなるほど、各種資質・能力の伸びの程度が相対的に大きくなる、という傾向が推察された。

多世代共創型の演劇ワークショップの設計にあたっては、個人差を考慮した個別最適型実践を目指すのではなく、個人差を考慮しながらも全員がそこで充実した経験を得ることができる演劇ワークショップの構築が必要と考えられる。

本研究は、小劇場がワークショップを通して複合的に地域の福祉を向上させるという新たな多世代共生社会の仮説的モデルに基づき、その中核となる、演劇ワークショップの開発と評価を行った。小劇場を高齢化に関する諸問題に苦しむ地域の支援の中核に据えたことは、画期的なモデルとして意義深いものであり、地域に眠る小劇場に新たな価値づけを行うものであった。国や自治体への具体的な政策提言につなげるために不可欠な定量的なエビデンスを得る試みにより、地域での演劇的手法によるコミュニケーション推進のための政策について、費用対効果を考慮した上で提言を行うことへの道筋をつけることができたと考えられる。



フリアン・サラサール Julián Salazar

コルドバ国立大学 教授
Professor, National University of Córdoba, Argentina



ディアギタ先住民社会の持続可能な開発戦略
—アンデス東南地域における文化遺産の調査および保護—

Sustainable Development Strategies for Native American Diaguita Communities:
Cultural heritage research and protection in the Eastern South Andes, Argentina

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 1,400,000 円 yen

This project was thought as a synthetic solution for three social and cultural issues: ethnical and economical exclusion, cultural heritage destruction and the knowledge gap on the local adaptations to agriculture. The main strategy for Material Cultural Heritage Conservation was to integrate high quality archaeological research and sustainable use of these resources in touristic activities managed by Native American Diaguita Communities.

The first step was to integrate local communities and other social agents in the project: A series of formation courses for local guides were taught; several meetings were organized in the local schools, aimed at explaining the relevance of Material Cultural Heritage and Local History to primary and secondary students; the project was presented in two communitarian and university fairs.

The development of scientific aspects of the project implied several archaeological fieldwork campaigns in Anfama and Tafi valley. Despite the seven hours walk across the yunga steep topography, carrying all the equipment in mule caravan, it is a privileged zone to carry out archaeological research. Six campaigns were carried out, in which we surveyed, discovered, mapped, and excavated 2000 years old archaeological sites. Because of these tasks, we have identified Formative and Late Intermediate periods archaeological sites. We have excavated house clusters, dating several contexts, and developed different studies on material culture (XRF provenance studies of obsidian, identification of silicon phytoliths and starch grains, stylistic and functional studies of pottery vessels and stone tools, etc.).

The sites discovered, recorded, and excavated in this project are outstanding manifestations of the villager settings in the region. Besides archaeological remains in surface, solid architectural remains, lithic sculptures, unique location, and surrounding landscapes, they are important remains to understand historical transformations in the region.

Finally, the archeological circuits were definitively taken to the field. The paths were planned with local and Diaguita native communities in order to integrate archaeological interest points, local sacred places and panoramic views, considering and reducing the different impacts in the landscape. Several explanatory stops were materialized by placing interpretative metallic signs. Furthermore, the circuits were digitalized in the project web page, where Digital 360 ° Circuits were modeled and are actually free access resources (<http://arqueologiatafi.com>).

The achievements of the project could be summarized in five main aspects: 1) Discovery of new archaeological sites; 2) materialization of six archaeological touristic circuits; 3) formation of a group of local guides; 4) Socialization of the main idea of the project; 5) Sustainability of the project.



木場 紗綾 Saya Kiba

公立小松大学国際文化交流学部 准教授
Associate Professor, Faculty of Intercultural Communication, Komatsu University



東南アジアにおけるコミュニティ・ポリシングの実践から学ぶ
—治安改善および警察改革へのインパクトの検討—

Community Policing in Southeast Asia: Assessing the impact on community security and police reform

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 5,800,000 円 yen

コミュニティ・ポリシング (CP) とは、警察と住民の協働によって地域の防犯対策を講じたり、地域内の諸問題の解決を図ったり、治安の改善を目指したりする取り組みである。警察は人権や宗教、ジェンダーなどに関する訓練を受け、警察署の環境を改善し、住民からの信頼獲得に努める。住民は必要に応じて警察に情報を提供する。もともとは 1960 年代の米国で、貧困や差別に起因する治安の悪化への対応策として導入された経緯がある。その後、紛争や内戦後の国家再建とコミュニティの和解のプロセスとしても注目されるようになった。東南アジアのインドネシア、フィリピン、タイ、東ティモールでは、政府がコミュニティ・ポリシングを警察の組織改革の一環として法的・制度的に位置付け、導入してきた。また、日本の国際協力機構 (JICA) を含む西側諸国は過去 20 年間にわたって、これらの国々に専門家を派遣し、コミュニティ・ポリシング事業を支援してきた。それによって警察の捜査能力は一定程度向上し、警察官の職務意識も変化してきたとされる。

しかし、そう簡単に事業は進んでいない。警察機構は慢性的な予算不足とキャパシティ不足に悩んでおり、警察官の汚職や裏取引は深刻である。西欧諸国では、従来は国家が安全保障上の役割を独占しており、近年になって次第に、国際機関や NGO、民間軍事会社などの多様な主体が国家と役割を共有するようになってきた。一方で非西欧のいくつもの国々では、中央政府が完全に暴力を独占できたことはなく、私兵、ギャング、自警団、ゲリラといった民間の武装集団が国家の役割を肩代わりしてきた。東南アジアにおいては、非国家武装組織 (民兵や自警団、マフィアなど) が未だに社会に跋扈している。彼らは違法に武器を所持・使用し、地域社会の治安を脅かしつつも、一方ではコミュニティ住民を庇護し、一定の支持や信頼を集めている。都市部、農村部ともに残存する非国家武装組織に対しては、現地の警察は有効な対策を講じておらず、一時的な妥協や懐柔、妥協に基づく不安定なセキュリティ・ガバナンスが続いている。

本研究の目的は、①東南アジアのコミュニティ・ポリシングの実態を明らかにすること、②コミュニティ・ポリシングが治安改善や警察の民主的改革に結びつくメカニズム、条件を、学際的に追求することである。

本プロジェクトは 2017 年 5 月に開始し、2019 年 11 月に完了した。また合計 10 本の書籍及び論文を刊行した。



池崎 澄江 Sumie Ikezaki

千葉大学大学院看護学研究科 准教授
Associate Professor, Graduate School of Nursing, Chiba University



高齢者施設のエンドオブライフケアに関する日韓泰国際比較研究 —アジア型教育プログラムの開発に向けて—

A Multi-country Comparative Study on End-of-life Care in Residential Care Facilities for Older People in Japan, Korea, and Thailand: Towards developing an Asia-oriented educational program

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 3,300,000 円 yen

【背景 / 目的】

アジアの高齢化は今後急速に進み、2030年の予測では日本36%、韓国31%である。このことは、老いて死にゆく人の増大も意味しており、多死社会（人口減少社会）を迎えることへの社会的関心が高まっているが、増大する死亡数の半分以上は85歳以上の死である。生の最晩年となる80～100代の老年期は要介護状態や認知症を有している者も増え、救命や延命を意図した終末期治療ではなく、本人の望む生活の継続を保つうえで、苦痛なく尊厳をもって人生を全うできるエンド・オブ・ライフ・ケア（以下、EOLC）のアプローチが重要である。そして、その中心的な役割は看護職であると指摘されている（WHO, 2014）。本研究では、要介護高齢者が長期に滞在する高齢者施設に焦点をあて、このような生活施設において必要とされる看護職の実践能力を構造化し、国際的に比較検討する枠組みについて検討することを目的とした。

【実施内容】

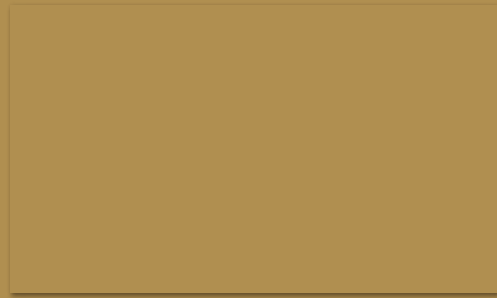
まず、日本・韓国・タイの高齢者施設の制度的背景やケアの実践を明らかにするため、各国の高齢者施設や関連施設で働く看護職、介護職、施設管理者やEOLCに関する教育研究者へのインタビュー調査（日本n=9、韓国n=8、タイn=6）を実施し、施設形態、入居者構成、職員構成、各職種の役割、EOLC実践内容等を明らかにした。次に3か国において、高齢者施設EOLCに関わる教育研究者と実践家を専門家パネルとして選定し（日本n=25、韓国n=10、タイn=25）、デルファイ法を用い3ラウンドにわたるオンラインまたはメールによる質問紙調査を実施した。デルファイでの基準同意率は70%とし、合意形成を行った。3回のデルファイ調査の結果、日本のコンピテンシーは7次元の計71項目、韓国では13項目、タイでは38項目となった。これらを概観すると「尊厳」「コミュニケーション」「エンドオブライフ期の兆候と判断」「症状マネジメント」といった緩和ケアの基本的なものが各国で共通した。各国でみられた特性としては、日本では「多職種チームでの連携」や「医療的介入の必要性の判断」があたり、韓国やタイでは「スピリチュアルケア」や「（自身の）ストレスマネジメント」があたり、違いがみられた。なお、日本ではさらにグループインタビューを行ってコンピテンシーリストについて議論を行っており、その際に実践家や研究者間では高齢者施設におけるスピリチュアルケアのニーズの把握やケア実践の蓄積が十分とはいえず、重要性があっても実践能力として具現化することが困難だという意見がみられた。

これらの研究成果を共有し議論するために、2019年3月に都内で各国の研究メンバーによる講演とパネルディスカッションを含めた国際シンポジウムを実施した。参加者は105名あり、主に老年看護を専門とする教育・研究者であった。シンポジウムの中では、各国での施設看護職の緩和ケア実践力の向上に向けた教育・研修の状況について議論があり、現場の実践家向けに長期ケア施設用のプログラムの重要性が指摘された。

【まとめ】

3か国での共同研究をふまえ、アジアの高齢者施設におけるエンドオブライフケアの実践力の重要性を確信できた。これらのコンピテンシーの難易度と効果的な研修方法についてさらに検討していくことが必要である。





B 個人研究助成 Individual Research Grants



ファルハナ・フェルドゥース Farhana Ferdous

ハワード大学

Assistant Professor (Tenure Track), Department of Architecture, College of engineering and Architecture, Howard University

環境デザインと健康

—認知症患者のケア施設において環境デザインが果たす役割—

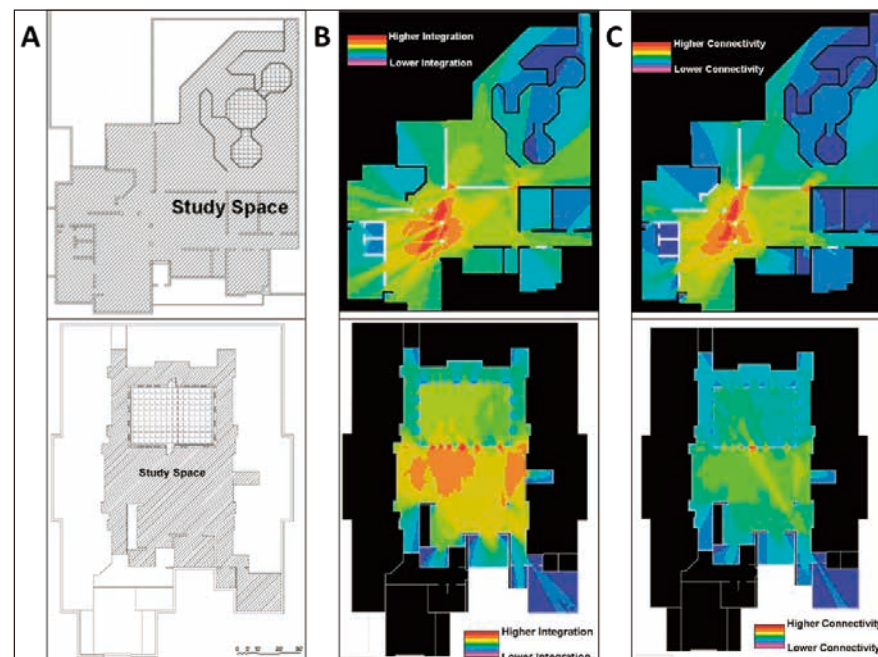
Positive Health Outcomes by Environmental Design: The role of spatial configuration in designing physical environment for people experiencing dementia



助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,200,000 円 yen

From the last 40 years, the design of the physical environment in supporting dementia residents has been frequently mentioned in the research literature. The environmental design research literature has outlined the importance of social interaction and social network as one of the therapeutic goals to maintain the quality of life (QoL) for people experiencing dementia. Although several previous studies have conducted the empirical literature review to understand the physical environment and associated QoL in long-term care facilities (LTCF), no single study concentrated on the role of spatial design in social interaction. For elderly people with dementia, changes in their social or physical environment, or manifestations of dementia may have an influence on their social interaction and therefore, it is imperative to understand the factors associated with the physical environment, social interaction and thereby the improved quality of life (QoL). This research aimed to fill this gap and contribute to a better understanding of how 'social interaction', the most important determinants to measure QoL for people experiencing dementia could be influenced under different spatial design and environmental characteristics. This research provides a comprehensive understanding of the on-site field observation and published evidence from diversified sectors such as medical and health literature, environmental psychology, architecture, interior design, and evidence-based design literature. By reviewing relevant literature, discussing environmental design factors, analyzing case studies and behavior observations, this project outlines several critical spatial design characteristics and a comprehensive set of spatial design overview for long-term care facilities that shown to affect positive social interaction and QoL of the residents, staff and their caregivers. The findings of this research could influence the future design of care facilities and provide designers the effectiveness or the weaknesses of their design decisions. As an expected outcome, this applied research could enhance the value and professional practice knowledge of memory care design that have a positive ripple effect in the healthcare design industry worldwide.

Figure 1.
(A) The original floor plans and layouts,
(B) corresponding visual integration maps and
(C) visual connectivity maps of two care facilities.
Numerical, objective values for integration and connectivity are derived from properties of these maps using spatial syntax software. The red-colored space indicates higher integration and connectivity values; blue-colored space indicates lower integration and connectivity values.



鈴木 愛 Ai Suzuki

首都大学東京 都市環境科学研究科 日本学術振興会 特別研究員 PD
JSPS Postdoctoral Research Fellow, Graduate School of Urban Environmental Sciences



バングラディッシュ北東部の湿地におけるスナドリネコと人と軋轢緩和に関する研究 —軋轢の基礎調査と軋轢緩和における住民参加型調査の可能性—

Mitigation of Conflict between Local Community and Fishing Cats in Hail Hanor, Northeastern Bangladesh: Interdisciplinary survey on conflict and possibility of participatory research in conflict mitigation

助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,400,000 円 yen

人との共存は食肉目の保全における大きな課題の一つである。小型のネコ科動物であるスナドリネコにとっても、生息地である湿地の消失・劣化に加えて、湿地周辺に住む人々との軋轢は大きな脅威となっている。バングラディッシュ北東部の内陸湿地はスナドリネコにとって重要な生息地であり、地域住民との湿地の魚や家禽をめぐる軋轢によるスナドリネコの捕殺がバングラディッシュ国内の中でも特に多いとされている。そこで本研究では、スナドリネコと人との共存にむけ、バングラディッシュ北東部に位置する内陸湿地の一つを対象地域とし、まず(1)軋轢の現状を把握し、(2)即効性が高い解決策を模索した。同時に、根本的な軋轢の緩和策の模索として、(3)これらの調査研究に地域住民が実際に参加し、その結果を自らの言葉で他人に伝える機会を持つことで、スナドリネコに対する認識の変化につながる可能性があるかを検討した。

それぞれの概要および今後の展開を以下に述べる。

(1) 軋轢の現状の把握：軋轢の現状把握として、特にスナドリネコと人との食べもの・利用場所の重複と、地域住民のスナドリネコに対する捕殺意図に着目した。スナドリネコと人との重複については、住民が特に重要だとした上位 10 種のうち、スナドリネコの餌動物としてフンから検出されたのは 1 種であった。スナドリネコの分布予測からは湿地林の重要性が示唆されたが、残存している湿地林はどこも人による人為的圧力は高く、保全上の大きな懸念が明らかになった。地域住民はスナドリネコによる経済的な損失のリスクは低いと認識していた。捕殺する意図形成に大きく寄与していたのは主観的規範であった。これにより、研究地域におけるスナドリネコの捕殺は、ニッチの重複に伴う経済的損失よりも、他の要因が大きく寄与していると考えられた。

(2) 即効性が高い解決策の模索：軋轢の現状把握から、経済的な損失の減少を促すことは必ずしも地域住民と人々の関係の改善に結びつかないと考えられた。世帯の現金収入獲得における家禽への依存度も低く、自給自足における重要性も、海外への出稼ぎや村外での労働が増加しているため、今後は低くなる可能性もあると考えられた。さらに、主観的規範に加えて、スナドリネコに対する恐怖心が捕殺する大きな要因であった。このトラと同一視する傾向は小学校低学年ですでに確認された。そのため、即効性が高い解決策として、経済的な損失を減少させる方法よりも、スナドリネコへの恐怖心に対するアプローチの模索に重点を移した。

(3) 軋轢の緩和策における参加型調査の可能性の模索：想定以上に湿地の踏査を続けることができる住民や学生は少なかったが、その中で調査を続けてくれた地域住民の意識の変容を観察し、聞き取りを行うことができた。長期間調査に参加することにより、調査チームとのレポートが構築された。認知から行動までの乖離は確認されず、すぐに行動の変容が見られた。環境教育という形ではなく、自分自身で新しい知見を発見していく場を提供することで、認知—行動モデルにおける外的情報から認知のプロセスの質を向上させることができると考えられた。

(4) 今後の展開：本研究を実施したことにより、スナドリネコに好意的な地域住民が出てきたり、地域の学校との共同イベントはメディアで取り上げられた。また、調査に参加した学生も 2 名は、スナドリネコと人との軋轢研究を続けるために日本で博士課程に進むことが決まった。そして、スナドリネコの捕殺を実際に減少させるためには、地域で活動を継続・拡大していく必要があると考え、一般社団法人を設立した。今後も、現地の学生や小学校と協力しながら、研究結果を地域での実践にいかしていく予定である。



エヴァン・エリース・イーストン - カラブリア Evan Elise Easton-Calabria

オクスフォード大学難民研究センター 大学院生
Graduate student, Refugee Studies Centre, University of Oxford



「お荷物」から「恩恵をもたらす人びと」へ
—カンパラとベルリンにおける難民主導型人道支援の事例—

From "Burdens" to "Benefits": Exploring refugee-led humanitarian assistance in Kampala and Berlin

助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,500,000 円 yen

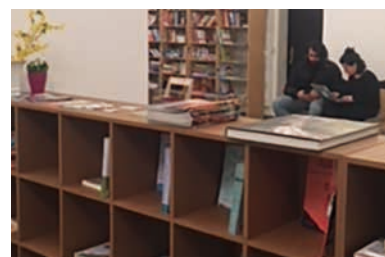
Through qualitative and quantitative research in Kampala, Uganda, and Berlin, Germany, this research project created an evidence base of refugee-led assistance amongst refugees from Syria, the Democratic Republic of Congo, Somalia, and South Sudan. In so doing it sought to promote the values of inclusivity and partnership within the international humanitarian system. This was done in part through drawing on theoretical frameworks of refugee integration and social capital.

Our research found that refugees engage in collective action and self-help across economic, political, and social contexts – and notably humanitarian assistance. Initially, grassroots support by Syrians in Berlin mainly took the form of helping refugees receive emergency assistance and navigate Germany's asylum and registration bureaucracy. In the early days of high numbers of refugee arrivals, for instance, groups of Syrian refugees stationed themselves at main train stations in Germany, and equipped newcomers with maps, directions, and overviews of next steps to registering and finding shelter. However, in the last three years there has been a shift from providing logistics and daily life assistance to offering cultural, community, and creative support that meets refugees' psychological, emotional, and personal needs. In many cases, these refugee-led efforts are now registered German organisations.

In Kampala, Uganda*, refugee-led organisations are important sources of social and practical resources for refugees. These organisations offer skills training in a variety of areas such as tailoring, arts and crafts, hairdressing and computer literacy. Functional adult literacy classes and basic to advanced English lessons are also provided. Organisations also offer community-based micro-savings and lending groups run by refugee leaders, which address refugees' abiding exclusion from formal micro-finance institutions.

Despite their work, the capacity for refugees to self-organise and provide support is largely unrecognised and this, whether unintended or not, serves to perpetuate the perception of refugees as merely beneficiaries, even where guidance documents are designed to utilise their agency. Our research found that providing funding dedicated to sustaining and strengthening refugee-run organisations is an important step to take. A shift in current rhetoric and practice from seeking refugee participation in programmes to forming refugee partnerships to implement them – and thus holding the value of inclusivity at their core – is perhaps an even better one.

*The research in Uganda was conducted in tandem with a research project run by the Refugee Studies Centre, University of Oxford.



牧野 冬生 Fuyuki Makino

早稲田大学アジア太平洋研究センター 特別センター員
Research Fellow, The Institute of Asia-Pacific Studies at Waseda University



カンボジアにおける「慰霊の空間」と負の記憶の継承儀礼に関する研究
—「負の出来事の当事者性」の把握とアクティブデータベースの構築—

The Study of Transferring Events of Negative Memories at the Public and Local Memorial Spaces in Cambodia: Recognition of "the positionality of negative events" and conducting the formation of an active database

助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,400,000 円 yen

本プロジェクトでは、カンボジアの各地に点在する慰霊の空間において人類学的フィールド調査を実施し、「負の記憶に関する儀礼」と「負の記憶の継承プロセス」を調査した。また、「負の出来事に関する当事者性」の把握を行うとともに、アクティブ・データベースの構築を行った。具体的には、慰霊の空間に関わる各種文献調査、現地での実地調査、カンボジア研究者との打ち合わせ、インフォーマント（クメール・ルージュの被害者等）へのインタビュー調査、カンボジアの大学生へのアンケート調査等が含まれる。

まず、公的な慰霊の空間としては、チュンエク大量虐殺センター（通称キリング・フィールド）、トゥール・スレン虐殺犯罪博物館、タ・モク自邸（アンロンベン博物館）の三カ所が主なものである。着目すべき点としては、かつてポル・ポト派の強い勢力下にあったアンロンベンの公的な負の遺産の表象は、使用される文言や展示内容などに特徴が見られ、プノンペンにある二つの博物館とは大きく異なるものであった。

ローカルな慰霊空間の調査は、事前調査によりインフォーマントとの関係が十分に築かれていたスパイ・リエン州の2ヶ所の寺院と、寺院に隣接するローカルな慰霊空間を中心に実施した。ここでは、負の記憶に関する農村と寺院による共同儀礼と、記憶の継承プロセスを把握することができた。ローカルな慰霊の場は、信頼関係を築きにくい者同士が関係をつなげる寛容性を長期の時間をかけて滋養してきたことがわかった。

公的な負の遺産とローカルな負の記憶を継承するデータベースの作成に関しては、テスト版を2018年12月にリリースして研究者間で運用を行い、現在はベータ版を経て正式リリース版を運用している。また、上記のフィールドワークで得られた知見を共有しながら批判的な議論を行うことを目的にカンボジアで研究会を開催し、負の遺産の分析の際に重要となる前提条件と、ローカルな慰霊の場の構成要素について議論を重ねた。理論的な成果として論文雑誌への投稿を行い、プロジェクトの成果を社会に発信することに努めた。



写真1: 慰霊ストウパ



写真2: チュンエク虐殺センター



写真3: 寺院での記憶の継承の場

高村 加珠恵 Kazue Takamura

マギル大学国際開発研究所 講師
Faculty Lecturer, Institute for the Study of International Development, McGill University



日本とカナダにおける外国人収容の実態とその人権擁護 —両国間の比較分析—

Ethnography of Immigration Detention and Migrant Advocacy in Japan and Canada:
A comparative analysis of civil society in illiberal and liberal immigration regimes

助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,100,000 円 yen

The primary goal of this project was to compare the conditions of immigration detention in Japan and Canada, as well as the role of pro-migrant civic groups in affecting immigration detention policies. In recent years, emerging global concerns have arisen regarding human rights violations toward migrants, including explained deaths in detention facilities, prolonged detention of asylum-seekers, and detention of minors. This study intended to provide a more nuanced analysis of capacity, behavior, and values of civil society through a distinct global dilemma of immigration detention.

The results of my research project are manifested in the following ways.

First, I organized panels on immigration detention in two major international conferences (Association for Asian Studies Annual Conferences in March 2017 as well as in March 2018).

Second, I organized a total of three workshops in Canada and Japan. These include: (1) “Seminar on Mobility and Human Rights: Interrogating Immigration Detention in Japan” (co-organized with the Stateless Network and Professor Chen Tien-Shi) at Waseda University on July 8, 2017; (2) “Forum on Migrant Workers’ Rights” (co-organized with the Association for the Rights of Household Workers) at McGill University on November 16, 2017; and (3) “Immigration Detention and Human Rights of Non-Status Migrants: An Emerging International Dilemma” (co-organized with Professor Junichi Akashi) at Tsukuba University on July 5, 2018.

Third, I presented papers for major international academic conferences. These include: (1) Association for Asian Studies Annual Conferences; (2) International Political Science Association World Congress; (3) Canadian Council for Southeast Asian Studies Biennial Meeting; (4) International Convention of Asia Scholars Annual Meeting; and (5) Annual Meeting of the Canadian Association for the Study of International Development.

Fourth, based on my field research in Japan, (1) I published a policy brief entitled “Human Rights of Non-Status Migrants in Japan” (co-authored with Erik Kuhonta, ISID Policy Brief PB-2017-07, Montreal: Institute for the Study of International Development, McGill University) in 2017. (2) I contributed a short essay entitled “Immigration Detention in Japan: Rethinking Multicultural Cohabitation” to Joint, Toyota Foundation Journal (No. 29) in 2019. (3) I submitted a report on immigration detention in Japan, under the name of a Japanese NGO Ushiku-no-kai, to the UN Committee on the Protection of Rights of All Migrant Workers and Members of Their Families (Draft General Comment No. 5 on migrants’ Rights to Liberty and Freedom from Arbitrary Detention) in April 2019. (4) Finally, I also wrote a paper entitled “The Migrant Surveillance Regime and the Plight of Migrant Detainees in Japan” and submitted to Contemporary Japan (revised version submitted on May 27, 2019).



澤崎 賢一 Kenichi Sawazaki

アーティスト／映像作家
Video artist/Film director



「暮らしの目線」に見るフィールド研究の感性 —映像メディアを活かす超学際研究の表現形の探究—

Senses of Field Studies Standing on Peoples' Livelihood: The search for phenotype of interdisciplinary research to take advantage of the video media

助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,400,000 円 yen

■プロジェクトの概要

(1) 問題点

アジアやアフリカのフィールド調査の現場の多くは、人間生存のための生業や開発が資源・生態環境を刻々と蝕みつつあるなど、時限を帯びて深刻化する諸問題に直面している。他方で、調査過程を「暮らしの目線」から眺めると、依然として存在する多様な文化や社会、生業体、在来知、人びとの活力などに、諸問題の解決やありべき未来社会の形成に向けた潜在性を見出すことができる。しかし、従来研究の論文を中心とする表現だけでは、それら潜在性を十分に表現できていないのではないかと。

(2) 解決方策

資源・生態環境を蝕む急激で過剰な破壊を抑制するのは、資源・生態環境への人びとの慎み深い思慮や態度—端的には「畏れ・敬い」—ではないか。この感性（在来知の潜在性）を最も多感的に捉え、広く共有することができる映像表現によって、その潜在性を活かすことのできる専門領域を乗り越えた方途を形成し、提案する。

(3) 研究目的

アジア・アフリカ・日本各地を対象地に、これまでの学術研究で表現されてこなかった「研究者とそれと呼応する人びとの感性」を映像によって表現するための手法を構築する。そして、「暮らしの目線」から人びとの心象風景や地域の実態を捉え、自然との共生を文化に織り込む芸術表現の実現、また開発支援や生態系・生物多様性の保全などの社会実践の一助となることを目指す。

(4) 研究方法

① 研究者のフィールド調査に同行し、調査風景のみならず旅程全体をできるだけまるごと映像で記録していく。同時に、映像独自の時間の流れの中で、最も在来知の潜在性を表現できる編集手法を探っていく。

② 芸術表現と社会実践を同時に実現するために、記録した映像を「(a) 映像作品」と「(b) 映像教材」として、研究者が所属する機関のワークショップや講演会、また YouTube や iTunesU で発信する。(a) 映像作品：文化の記録と芸術表現の両立を探りながら、課題の共有に必要な言語化以前の感情を鑑賞者の心に深く刻みこむ芸術的表現として映像を制作する。(b) 映像教材：調査内容をわかりやすく説明すると共に、多様な専門領域を持つ研究者の活動を包括的に結び付け、「反転授業」などで活用できる映像教材として研究者と共同でまとめる。

■プロジェクトの成果

(1) プロジェクト「暮らしのモニタージュ」の設立、および公式 YouTube の開設

映像を活用した超学際的研究手法を創出するためのプラットフォームとして一般社団法人を設立し、研究者やアーティストらと共にプロジェクト「暮らしのモニタージュ」を立ち上げた。また、制作する映像作品を広く一般に公開するために、公式 YouTube を開設した。

(2) 「暮らしの目線」でフィールド調査を記録した映像作品の制作

ベトナムでの学習支援活動を記録した映像作品《貧困の連鎖を断ち切る〜ベトナム・フエ市での学習支援〜》、高知県の怒田集落での活動を記録した《怒田集落・地域の「ための」民謡づくり・「たらしめことば」の語りとアートの実践》、ブルキナファソ、タンザニア、ケニアなどでの活動を短く紹介する映像シリーズ《LIVES as one's landscape》など多数の映像作品を制作した。

(3) 学会、講演会、ワークショップ、展示会などで映像を活用

制作した映像作品は、総合地球環境学研究所が企画する研究会や講演会、日本国際地域開発学会、京都市立芸術大学での研究発表、タンザニアで開催された農業祭での展示上映、こども向けの講演会など、多様な場面で活用された。

(4) ウェブマガジン「シネフィル」にて、フィールド調査での出来事を綴った連載記事

研究者との旅程を、撮影者のまなざしによってテキストと写真で一般向けに綴ることで、フィールドの潜在性を探る試みを行った。



ヨ一・カー・シー Yeoh Kar See

マラヤ大学医学部 大学院生
Graduate student, Faculty of Medicine, University of Malaya



BRCA 遺伝子変異を持つ女性の乳がん発症を防ぐための意思決定方法に関する新しい価値の考察

Exploring a New Value of Shared Decision-making for Prevention of Breast Cancer in Women with BRCA Gene Mutations

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 1,300,000 円 yen

Women who inherit a BRCA genetic change have a much higher risk of developing breast cancer than the general population. To reduce their risks of breast cancer, women face difficult decisions on multiple complex medical options and health outcomes. This presents unique challenges to women's decision-making without the benefits of any appropriate decision support. Thus, this research aims to reduce the risk of breast cancer and improve quality of life for women through a new value of shared decision-making between clinicians and women.

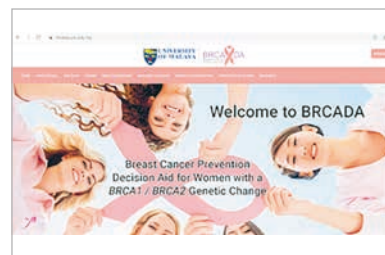
To achieve this objective, a BReast CANcer prevention Decision Aid (BRCADA) for women with a BRCA genetic change was developed, field-tested and distributed to clinicians in Malaysia. To guide the development of BRCADA, in-depth interviews were conducted with 32 clinicians and 35 women to understand their perspectives about how BRCA carriers perceive their breast cancer risk and decide on preventive options.

Findings indicate that cancer risk is not a well-understood concept among BRCA carriers. Majority did not know the cancer risk estimates of their carrier status, which affected their decision-making. Women viewed their healthy breasts on an implicit continuum between two divergent conceptualizations, "Why remove something that is healthy?" and "Life and peace of mind from cancer worry are more important than breasts."

Women who refused preventive surgery regard breasts as important for self-esteem and body image. Consideration for significant others and beliefs in God/ fate influenced women's choice to keep their healthy breasts. Conversely, women who chose surgery believe that it's not worth taking the risk of developing breast cancer by keeping their healthy breasts. They regarded life as more important than breasts and conceptualised preventive surgery as peace of mind from cancer worry.

These findings informed the systematic development of BRCADA, which provides information about the different breast cancer preventive options and helps women clarify their values, concerns and support system that are important to their decision-making.

BRCADA was field-tested with 51 clinicians and 20 carriers. Overall, they perceived BRCADA as useful in preparing BRCA carriers to communicate with their surgeons at a consultation visit and to make breast cancer preventive decisions. They found BRCADA to be easy to understand, balanced, visually appealing and just right in length. Using BRCADA results in significant improvements in women's risk perception of breast cancer and knowledge of preventive options. Following the findings from field-testing, a final version of BRCADA was printed and a resource website (<https://brcada.um.edu.my>) was developed.



今井 友樹 Tomoki Imai

株式会社工房ギャレット 記録映画監督
Documentary film director, Studio-Garret



自然と人にある「境界」をめぐる一心意伝承に新たな可能性を拓く

On the "Boundary" that Lies between Nature and Human: To open up new possibilities for "image folklore"

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 1,400,000 円 yen

〈プロジェクトの概要〉

▶プロジェクトの課題:現代社会は“心の貧しさからいかに解放されるか”を模索している。それは自然と人にある「境界」を無理に切り離したことで招いた結果ではないだろうか。これまで我々は、人間生活において混沌・恐怖・死といった“不安なもの”を高度な科学技術や社会制度の発展によって克服しようとしてきた。しかし我々が直面している諸問題は発展による恩恵の裏側で引き起こされており、必ずしも発展は幸福に繋がらないと考えるようになってきている。本研究は、この課題解決の手掛かりを「心意伝承」の世界に求め、現代社会で「境界」はなぜ切り離されたのか、その功罪は何であるかを本研究の柱とし、多様な視点で問い直した。その上で先人たちが抱えてきた“不安なもの”を“心の豊かさ”として捉え、切り離された「境界」を地続きの世界としてどのように現代社会に見出すことができるかを目指した。

▶研究の内容・方法:先人たちは“不安なもの”(=心意伝承)を、自然と人にある曖昧な「境界」として機能させてきた。岐阜県東白川村の心意伝承の1事例であるツチノコ伝承を手掛かりアンケートやインタビュー取材を行った。もともと東白川村ではツチノコの目撃者は、「見たら人には言っちゃいけない、災いが起こる」と考えられていた。しかし現在は、ツチノコを観光資源として検索イベントを行ったり、ツチノコ関連グッズがお土産になっている。その歴史と変容過程を目撃者や関係者などにインタビュー取材を行った。さらに全国の同様な事例先にも取材をし、いかに伝承され、どのような役割を果たしてきたのかの検証と比較を行った。

〈成果物〉

記録映画作品にまとめて発表する予定である。東白川村で毎年5月3日に開催されている「つちのこフェスタ」のイベントを本研究のメインに据えていたが、平成30年の開催が雨により中止になった。よって助成期間終了後の令和元年5月3日のイベント開催を取材した。その為、成果物とする記録映画作品は、年内に編集・完成、翌年2020年春以降に劇場公開を目指す。

▶▶記録映画作品「(仮題)ふるさとのツチノコを追って」(約90分)

▶作品内容:「ツチノコはいると思うか?」この問いに、おそらく大半の現代人は「いない」と答えるだろう。ビール瓶を飲み込んだ蛇のようで、飛んだり、転がったり…。様々な目撃情報があるものの、未だに発見されていない謎だらけのツチノコ。私の生まれ育ったふるさと・岐阜県東白川村は、平成元年からツチノコを観光資源として、ツチノコ検索のイベントを毎年行い、村おこしに利用している。私は子どものころ「いる」と信じていた。しかしいまは「いない」と冷めている。なぜ気持ちが変わったのか。本作で描かんとするのは、「いる」・「いない」の問いの間(境界)に隠された、ふるさとの自然観の変容である。自然を相手に暮らしてきた人は、理解できないもの、不可解なものに遭遇することがある。そんなとき、かつてなら「妖怪に出会った」とか、「狐に騙された」とか、お互いに了解され共有された世間があった。しかし、いまそんなことを言えば「迷信だ」と片付けられてしまうだろう。もしかしたらツチノコは「いる」と信じた人・時代のほうが心豊かであったと言えるのかもしれない。「いない」と思う現代人が、如何に「いる」と思う世界を共有できるのか。・・・果たして、本当にツチノコはいるのだろうか?



竹原 健二 Kenji Takehara

国立研究開発法人国立成育医療研究センター研究所政策科学研究部 政策開発研究室長
Chief, Division of Health Policy Development and Research, Department of Health Policy, National Center for Child Health and Development



「イクメン」はわが国の父親のありようの理想像といえるのか
—「イクメンブーム」がもたらした影響とそれにより失った何かを問い直す—

Should "Ikumen" be Ideal Model of Fathers in Japan?: The effect of "ikumen" boom and something that we lost by the boom

助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,300,000 円 yen

本研究では、「イクメン」という概念の登場によって、わが国の父親のありようがどのように変わってきたのか、その変遷を明らかにするとともに、現在の父親を取り巻く生活・労働環境について明らかにすることを目的とした。これらの実態把握をおこなうことによって、子育て世代の夫婦がどのような父親像を描いているのか、そしてその実現に向けてどのような社会制度が望ましいのか、といったことを提言することを目指した。

この目的を達成するために、本研究では、「調査 1：イクメンに関連した書籍や論文のレビュー」、「調査 2：父親を取り巻く生活・労働環境と家事・育児の状況に関する政府統計のレビュー」という2つの既存資料のレビューをおこない、過去の「イクメン」や父親の家事・育児に関する言説や社会的な風潮などの整理を試みた。その後、子育て中の父親 3,092人を対象に「調査 3：幼い子どもを育てている父親の生活の実態と理想に関する質問票調査」を実施し、現代の父親の役割やありよう、生活の実態および理想について記述的な解析をおこなった。

これら3つの調査から、イクメンブームは夫婦や父親個人の意識や価値観に対して、大きな影響を及ぼした一方で、具体的な行動変容、社会改革にまでは至っていない部分もまだ残されていた。その主な原因として、上記の個人の意識改革のスピードに対して、長時間労働など働き方の見直しなどの社会・環境の変容のスピードが鈍いことが考えられた。本研究における白書のレビューにおいても、「働き方の見直し」、「長時間労働」というキーワードは2000年代前半から繰り返し言及されていた。また、Web調査においても、1日あたり10時間以上の勤務をしている父親が半数を越えており、父親が育児に多くの時間と労力を割くことは難しい家庭が少なくないことが示された。

これらの結果は、イクメンブームによって、どれだけ父親のあり方について議論が活性化され、父親が家事・育児の担い手として積極的に関わることが期待されたとしても、長時間労働により時間的にも体力的にも、父親個人の努力ではその期待に応えられない側面があることを示唆している。こうした社会環境がより改善されて初めて、本当の意味で個々の父親がどれだけ、そしてどうやって育児に関わるのかが問われるのではないだろうか。

ライフスタイルや価値観の多様性を認める社会に変わりゆく中で、イクメンブームは父親のあり方について大きな方向性を示したが、言い換えると画一的な父親の理想像を強調することにもつながった。育児雑誌の記事の内容が、母親の育児については「正解はない」といった柔軟性を求める方向に移行したのに反し、父親の育児に関しては「～すべき論」という論調が大勢を占めるようになったことがそれを裏付けている。「イクメン」はあまりにインパクトが強いキーワードであったことや、男女共同参画の推進など、別の思惑からの影響があったものと推察される。それにより、本来、父親のあり方、父親の育児における役割など、もっと様々な意見が出て、議論の活性化が期待できたものの、それが達せられなかった可能性は否定できない。今後はそのような議論を深め、より成熟した社会への移行を目指すことが望まれる。

平山 亮 Ryo Hirayama

東京都健康長寿医療センター研究所 研究員
Research Fellow, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology



性的マイノリティとして老いること
—多様な生／性を受け容れる高齢社会の実現に向けて—

How Sexual Minorities Experience Aging: Identifying and tackling challenges toward an inclusive aged society

助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,400,000 円 yen

このプロジェクトは、性的マイノリティの視点から、現在の日本の老いを支えるしくみ・制度を(批判的に)問い直すことを目的とした。その問い直しを通して、それらのしくみ・制度がいかに特定の人々の一異性愛で、性自認が生まれたときの性別と一致した(=シスジェンダーの)人々の一老いる経験だけを念頭に置いているかを明らかにし、翻って、では性の多様性を前提とし、それを受け容れる包摂的高齢社会を目指すためには、現在のしくみ・制度をどのように改めていくべきか、検討することをねらいとした。

本プロジェクトが照準した老いを支えるしくみは、介護保険制度のもとでのケアマネジメントである。ケアマネジャーは現在、加齢にともなう身体的・認知的機能の低下によってこれまで通りの日常生活が難しくなったとき、必要なサービスをアレンジし、生活の質の維持継続を図るための中核的存在である。高齢者とケアサービスを繋ぐ役割を担うケアマネジャーが性自認や性的指向に関する理解を深め、異性愛・シスジェンダーに限らない高齢者のサポート環境をいつでも構築できるよう準備を整えておくことは、上記の目的に適うと考えたからである。

ただし本プロジェクトのゴールは、単に誰にとっても利用しやすいケアマネジメント体制を考えること、それ自体にあるわけではない。本プロジェクトが真に目指したのは、そのようなしくみを可能にするための理念を探ることである。性自認や性的指向にかかわらず、どんな高齢者でも同じように利用できるサービスは、その提供体制がどのような理念のもとに動いているからこそ可能になるのか。そのような理念こそが、包摂的高齢社会の実現に必要な「社会の新たな価値」になると考えた。

以上に取り組むにあたって、本プロジェクトは国外と国内でそれぞれ調査を行った。国外での調査の目的は、性的マイノリティ高齢者への支援を行い始めてからある程度の年月が経っている地域に赴き、現地の老いを支えるしくみ・制度、および、そこに通底する基本的な考え方を学ぶこと、それと比較対照させながら現在の日本の課題(何を变えていかなければいけないのか)を検討することであった。国内の調査では、国外の調査を通して浮かび上がった課題を、いかにして解決すべきかを具体的に考えることを目的とした。すなわち、国外の先進的な取り組みに通底する理念は、現在日本のケアマネジメントの現場にどの程度共有されているのか、また、その理念がケアマネジャーのあいだに浸透するためにはどのような施策が求められるかを、実証的かつ具体的に考えることが国内調査の目的であった。

国外調査はアメリカ・カリフォルニア州のサンフランシスコ市にて実施し、高齢の性的マイノリティを支援するためのNPO団体職員や、現地で生活する当事者への聞き取りを行った。調査からわかったことは、医療やその他のサービスの利用に関して、性自認・性的指向が何であれ差別的対応を受けない取り組みが注目されていると同時に、利用者の性に関する情報の開示を可能な限り必要としない(あちこちで同じように開示しなくても問題なくサービスが利用できる)工夫が考えられていたことである。

国内では国外調査の結果を踏まえ、全国の居宅介護支援事業所に質問紙を配布し、所属ケアマネジャーに回答を返送していただく郵送調査を行った(回答者数1,580名)。ケアマネジャーが性的マイノリティ高齢者をどのように受けとめているか、その個人差が何によって生じているかを統計的に解析した上で、その結果にもとづいて、利用者の性の多様性を前提にした業務を可能にするための具体的方法を提案した。また、介護サービスを利用する上で、性的マイノリティだけが自身の性自認・性的指向を問われなければいけない状況を変えるために、教育啓発を目的としたパンフレットを作成した。

B 新保 奈穂美 Naomi Shimpō

筑波大学生命環境系 助教

Assistant Professor, Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

多文化共生型コミュニティガーデンの社会実装に向けた実証研究

An Empirical Study on Community Gardens as a Step toward Multicultural Inclusive Societies



助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,400,000 円 yen

移民統合は多くの国における長年の課題であり、さらに昨今では外国人排斥のポピュリズムが高まっている。これは国境を越えた移動が容易になり、また経済成長が鈍化するなか、就労機会を奪われるのではという不安が高まったことなどに起因すると考えられる。過去の世界大戦のような過ちを繰り返さず、異なる文化を背景とする人々が理解し尊重しあう多文化共生型社会を形成することは、未来に必要な「社会の新たな価値」となる。日本においても少子高齢化による人口減少を背景に、外国人労働者や留学生を積極的に受け入れる方針が取られている。しかし、外国にルーツを持つ者を含めたコミュニティ形成をいかに進めていくべきか、その指針は示されておらず、そうしたコミュニティを醸成するための環境は十分に整備されていない。よって、多様な文化を持つ人々と日常的に接触でき、相互理解を促す場を形成する必要がある。その可能性の一つとして、ドイツでみられる多文化共生ガーデン (Interkultureller Garten) に着目し、まずは留学生や外国人研究員が増加する大学を対象地として実験を行うことにより、日本への適用可能性を考えることとした。

第一の研究課題として、先進事例調査としてドイツの多文化共生ガーデンの効果と運営方法を解明した。この調査は2017年度に主にハノーファー市、ベルリン市、ミュンヘン市で実施された。第二の研究課題としては、2017・2018年度に、筑波大学のミュージックガーデンを利用して、多文化共生ガーデンプロジェクトを実施し、参加者に対する半構造インタビュー調査や参与観察により、多文化共生ガーデンの効果や運営課題を明らかにした。

第一の研究課題からは、多文化共生ガーデンの効果について、移民同士の交流のきっかけが生み出されたが、移民とドイツ人の関わりには課題があることが明らかになった。ただし事例によっては移民とドイツ人の参加者が半分ずつになるよう調整が行われており、交流が促進されていることが示唆された。また、運営組織の活動内容や市・全国レベルの支援組織との関係性も明らかにした。たとえば、ベルリン市のある事例は、市の支援のもと、国の都市再生プログラムの資金を用いてボトムアップで作られたガーデンであり、現在は非営利企業によって運営されていた。さらにミュンヘン市では、市が整備するクラウトガルテン (貸農園) が移民の多いアパート近くに意図的に作られているなど、多文化共生ガーデンに準じた都市型農園もあることがわかった。これらの成果として、都市計画報告16号に報告2報、ランドスケープ研究81巻5号に論文1報が掲載されている。

第二の研究課題からは、大学に設けられた多文化共生ガーデンが、研究科や国境を越えた人々との出会いの機会や、異なる文化を持った人とのコミュニケーションを学ぶ機会を提供したことなどが明らかになった。運営課題に関しては、イベントに人を呼ぶのは容易である一方、定例作業日に新規参加者を招くことが困難であったこと、日本人以外の学生が主導権を取りづらいことなどが明らかになった。これらの研究進捗については2017 International Conference of Asian-Pacific Planning Societies で発表したほか、2019年度造園学会全国大会でポスター発表を行った。さらに2019年9月のECLAS Conference で口頭発表した。今後、最終成果を査読付き雑誌に投稿予定である。

以上の学術的な成果発表のほか、学識者・実践者を主対象として、本テーマに関連した研究や実践に取り組んでいる登壇者とともに「多文化共生×農の可能性を探るシンポジウム」を2019年3月16日に筑波大学東京キャンパス文京校舎で開催した。



B 岡部 正義 Masayoshi Okabe

フィリピン国立大学ディリマン校労働産業関係学研究所 上級講師・客員研究員

Senior Lecturer; Visiting Research Fellow, School of Labor and Industrial Relations, University of the Philippines Diliman

教育開発と「逆向きジェンダーギャップ」に関する社会経済学的研究 ーフィリピンの事例ー

A Socioeconomic Analysis on Reversed Gender Disparity in Education from Development Studies Perspective: A case from the Philippines



助成期間 Project Period : 2年 years 助成金額 Grant Amount : 1,300,000 円 yen

本研究の目的は、①途上国一般とは逆に女子より男子の教育水準が低いとされるフィリピンを対象に、②その「逆向きのジェンダーギャップ」が存在する背景を説明する枠組みを、現地調査を通じて探索的に構築することである。これまで、開発論のジェンダー分野では、女子教育振興が注目されてきておりこのことが今なお喫緊の課題であるが、近年は男子の問題もまた注目されようとしておりある。本研究は、男女間で男子が不平等だと各種指標で示されるフィリピンを対象とし、③主要先行研究が対象とした農業地域を中心とした初期条件の異なる調査地を対象に現地調査を行ない、④男子の教育不振の背景を社会経済及び教育を諸側面から探索的に分析し、解釈社会科学的に提示することを目指している。その意味で本研究は、教育経済学的な開発研究と、地域研究的なフィリピン教育研究を志向している。

現地調査は2017年8月から断続的に2018年3月まで、農村部としてミマロパ地方マリンドゥケ州の9村落を対象に実施された。パイロット調査では、現地の社会経済事情に加え、男児の「怠惰さ」を教育不振の背景に指摘する現地の声がかかれ興味深かった。そこで、生活利用時間を調査しようと研究枠組みを定め、日記式の質問紙調査に基づく時間利用分析を行った。各種の日々の生活時間の男女間パターンを計量的に分析するものであり、その後の分析に一年以上を要した。

分析の結果は、男子の教育不振は確かに子どもたち個人の観点で見れば、男女比較論として、男子の方が学習態度が定着せず、女子が宿題や復習に時間をよりかけている (その分、遊びなどの余暇に割く時間を抑えている、その意味では確かに「勤勉」と大人が呼ぶのも不自然ではない) のに比べて、その分、男子は遊びなどの余暇に多くの時間を割き、これが教育成果指標における男女差にも結び付いていると考えられる。しかし、基礎教育段階の子どもたちが、遊び時間により多くを使いたい、勉強や家事手伝いなどには時間を使いたくない、という行動パターンはある意味では自然なものでもある。本研究の分析結果は、それが母親の就労という社会経済的変数によって男女間で異なる反応を喚起しているという点がむしろ重要である。

男女平等の問題をシーソーゲームのようにゼロサムゲームとして考えて、男子側、女子側、どちらに数値的な意味で就学不利の方向が移ったか、と考えるのではなく、男子側にその不利の方向が移ったように見える状況のもとで、その内実を慎重に検討していく必要がある。本研究は、従来の女性に不利なジェンダー不平等とは一見して「逆向き」に見えるフィリピンを取り上げ、その内実、男子に不利な方向に作用している領域と、それが女性にもネガティブな作用をもたらす複雑でダイナミックな関係とがあることを描き出すことができた。しかし、この種の状況をどのように是正していくか、あるいはそもそも是正していく必要があるのか否か (放置してもよいという見方もあるかもしれない) については、研究助成の理念にある「価値」と隣り合わせの問題である。その国・地域の人びとがまずは自分たちの問題として、この問題を検討していく動きが加速することを期待したい。そして、さらには、国際協力・開発援助といった周辺諸国との協調関係のもとで、この問題をどのように理解し、どのようなジェンダー平等関係をその希求すべき「価値」に置くべきか、当研究プロジェクト自体は完了したいま、また新たに問われている気がしてならないと痛感する次第である。



西 麻衣子 Maiko Nishi

コロンビア大学建築・都市・保存学部大学院 大学院生
Graduate student, Graduate School of Architecture, Planning and Preservation, Columbia University



農村景観の多層的ガバナンス —日本の農地貸借における価値観の役割—

Multi-level Governance of Agricultural Landscapes: Role of value perspective on farmland tenancy arrangements in Japan

助成期間 Project Period : 1 year years 助成金額 Grant Amount : 700,000 円 yen

農地の耕作放棄は、食料の安全、生物多様性の変化、地域経済、文化的遺産などの側面から、社会の持続性に重大な影響を与えている。耕作放棄に対処するとともに農業セクターを再生するため、日本政府は様々な奨励・管理事業を通じて農地貸借を促進し、最近では新たに多層的に農地貸借を調整するメカニズムとして農地中間管理事業を導入した。

本研究では、多層的ガバナンスおよび自然の関係的価値の概念に基づいた分析的枠組みを活用し、農地貸借の過程において農地に対する異なる価値観がどのように相互作用するかを検討し、今後の農地管理における課題と機会を明らかにすることを試みた。土地利用型の水田農業の文脈において石川県の二つのコミュニティにおける農地中間管理事業の導入に焦点をあて、価値観と農地貸借に関する政策文書や学術文献のレビュー、記述統計学的分析、半構造化インタビュー調査（農業者、非耕作地権者、行政官、学識者、そのほかの関係団体の代表者・職員を対象）を含む詳細調査を実施した。二つのコミュニティに焦点をあてたことにより、農業者や地権者は、農地への愛着あるいは関心の有り様や程度によって異なる形で農地中間管理事業を導入していることが明らかになった。一つのコミュニティの農業者・地権者は、概して農地に対する地域社会の集団的な愛着・関心を基軸として農地の活用を目指し、事業を広範囲に導入していた。もう一つのコミュニティでは、農業者・地権者が、主に家族単位で私的な愛着・関心を維持し、農業の個人的な柔軟性を確保することが優先され、事業は限定的に導入されていた。また、経済的価値にとどまらず、社会的・文化的な価値を含む、農業者・地権者の農地に対する愛着・関心は、農業および農村景観の管理への長期的なコミットメントを促すことも明らかにした。

以上から、生産的な農地利用に依拠する農村景観の持続可能な管理を促進する上で、農地の物質的・経済的な側面に傾斜した現在の農地貸借モデルを補完するため、農地の主観的・文化的な側面により注目することが重要であることが示唆される。



陳 愛国 Aiguo Chen

上海交通大学人文学部 講師
Lecturer, School of Humanities, Shanghai Jiao Tong University



水環境の再生・保全における地域住民主体型の推進体制の構築に関する 日中比較研究

A Comparative Study on the Bottom-up Initiatives by Local Citizens in Promoting Water Environment Utilization and Preservation in Japan and China

助成期間 Project Period : 2 year years 助成金額 Grant Amount : 1,300,000 円 yen

1. 研究目的
水環境の再生・保全は、持続可能な社会の実現において非常に重要である。本プロジェクトは、日本と中国の湖沼・河川（主に日本滋賀県の琵琶湖流域、中国雲南省の洱海流域など）の水環境の保全を比較研究の対象とし、弱体化されがちな住民の権益、知識と組織を如何に格上げで重要視し、住民が主体的に行う持続的なボトムアップ型水環境の保全に向けた推進体制を如何に構築すべきかといった問題を明確にすることを目的とした。
2. 研究方法
本研究では、文献資料の分析と合わせて、聞き取り調査などの質的調査手法を採用している。
1) 水環境保全の理論・理念が日本と中国で如何に解説されて利用されているかを文献資料の整理・分析を通じて把握した。
2) 現地調査で滋賀県の琵琶湖流域と雲南省洱海流域などにおける環境保全促進策及び地方法規についての情報・資料を収集した。また、多数の住民にインタビュー調査を行ない、住民参画の実態と課題を明らかにした。さらに事例調査を通じて住民主体型の環境保全推進体制の構築について実証的に検討した。
3. 研究内容と研究結果
本研究では、2年間にわたって11回の現地調査を行うことができた。日本と中国でそれぞれ4回と7回現地調査を行ない、水環境の保全の全体像及び住民参画の実態と課題について把握した。
1) 外来の理念を能動的に導入・吸収する地域社会：環境保全の分野では、科学技術と環境保護の理念が地域社会に導入されるようになり、場合によっては地域社会が文化遺産や文化的景観、文化資源として指定されることも多くなった。外から内へ、上から下へと伝わってくるこうした理念と地域社会のニーズとのマッチングが行われており、琵琶湖流域の米原、針江、菅浦及び洱海流域の上村、打漁村、河尾村では、外来の理念を能動的に利用しようとする地域社会の姿があり、本研究ではまずそれを明らかにした。
2) 住民の妥協的「参加」からの脱出：本プロジェクトでは、環境保全の共通理念と地域適用策の多様性にも焦点を当てて調査を続けてきた。住民参加なくして、水環境の再生と保全の構想は描けない。日本と中国のモデル地域では、環境保全の共通点として、住民が公正公平に水資源を利用する「権益」が保障され、豊富な民俗「知識」が再構築され、そして水環境を管理する民間「組織」が地域社会でまだ機能していることが分かった。米原地域において伊吹山から流れてくる水の分配システムと現地の民間芸能とのかかわり、針江や大清水地域の湧き水の利用主体と自治体との関係、洱海の打漁村の老人協会による湧き水の利用と管理などが地域社会で大きな役割をはたしており、それぞれの地域の特徴にもなっている。
3) 環境アイコンの存在と役割：地域社会の水環境が内外に注目されるには、何かのきっかけが必要である。地域独特の環境アイコンがそのきっかけになる可能性が高い。環境アイコンの発掘と構築は、地域社会の伝統文化や民間組織と緊密にかかわっていることが多く、環境アイコンが、自然環境に関する多様な主体による多様な環境活動につながっていくということが分かった。本プロジェクトでは、地域社会と水生植物・動物とのかかわりについても聞き取り調査を進めてきた。地域特有の湧き水、カバタ、梅花藻、淡水魚のハリヨ、鵜飼い、井戸、水神などが地域社会の環境アイコンになっていることが明らかになった。
4. 成果物
1) 論文：「游弋于自然与文化之间：云南洱海鸬鹚境遇的民俗学解读」『文化遗产』2018（3）：103-109。
2) 口頭発表：「単一抑或多元：文化遗产的记忆与传承」、2018年6月10日、深圳市。
3) ワークショップの開催：地域住民への発信としては、2018年8月26日に雲南省大理市でワークショップを行った。地域住民、行政機関のメンバー、水環境分野のエンジニア及び学者といった多様な主体が日中の水環境の保全について議論を行い、発信することができた。



島田 千穂 Chiho Shimada

東京都健康長寿医療センター研究所 研究副部長
Theme Leader, Human Care Research Team, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology



治療優位の価値の再考 —高齢者の急性期医療の決定に伴う医療者のジレンマから—

Dilemmas for Medical Professionals in Determining the Course of Care for Oldest-Old Patients:
Reconsidering "cure-oriented" values in the realm of medicine

助成期間 Project Period : 2 years 助成金額 Grant Amount : 1,300,000 円 yen

研究の目的は、超高齢者への治療において、治療の成功が患者のQOLの向上に、必ずしもつながらない可能性がある現実に対して、ジレンマを抱える医療者の状況を、グループディスカッションと調査を用いて、情報収集することである。最終的には、患者にとってのより良い治療選択を実現するために、医療者の実情を踏まえた上での患者や家族の考え方の準備を啓発するパンフレットを作成する。

方法は、①課題の整理を目的とした医療者を対象としたグループディスカッション、②治療選択に関するジレンマを把握することを目的とした急性期病院の医療者対象の調査、③調査の結果を踏まえ超高齢者の治療選択をめぐる医療者の実情に関する情報収集を目的としたグループディスカッションの三段階で行った。

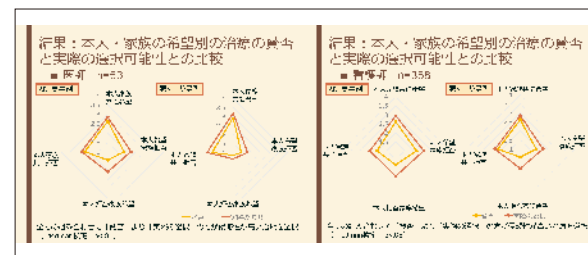
超高齢者の急性期治療の医療者のジレンマを生じさせる急性期病院が抱える課題については、1) 緩和ケア開始のタイミングの見定めが難しい、2) 家族の治療への期待に応える必要がある、3) 入院中の治療の成果としての退院後の状態を把握できず、フィードバックが得られない、4) 治療の選択支援における看護と医師との上下関係の強さが関連することがあげられた。

次に、治療選択に関するジレンマを把握するための調査を行い、急性期病院に勤務する医師 53 名、看護師 358 名から回答を得た。慢性閉塞性肺疾患 (COPD) の高齢患者を題材とした架空事例を用いて、ADL が高い状態設定 (事例1) と寝たきりの状態設定 (事例2) で、①酸素投与、薬物治療 (内服、点滴) などの非・低侵襲的治療、②呼吸不全に対する非侵襲的陽圧換気法: NIPPV、③呼吸不全に対する侵襲的人工換気法の選択に対し個人的意見としての賛否を問う質問と、実際に勤務する病院での選択可能性を問う質問を行った。双方共に再カテゴリー化し、侵襲性の低い選択から高い選択まで 4 段階の変数とした。

賛否と実現可能性とを比較したところ、医師、看護師のいずれも、事例1と2のいずれにおいても個人的な意見としての賛否より、実際の選択可能性の方が侵襲性が有意に高くなった。そのずれは、想定した患者の意思と家族の意思が異なる場合に、より大きくなった。患者と家族の意思がずれることで、医療者の治療選択における葛藤が大きい可能性が示された。

これらの結果を基に、医師 1 名、看護師 4 名からなる 2 グループで、治療選択をめぐるジレンマの実情について、グループディスカッションを行った。その結果、1) 本人の意思を第一に考えたいと思っても、本人の意思が不明確だったり、治療選択時には認知症があるなどで、本人の意思が確認できない場合が多い。できるだけ本人の意思を探索する努力をしたいと考えている。2) 治療の希望については、理由を合わせて聞きたい。なぜそう思うかが分かると、その人の生活上の価値観に合わせて治療を提案できる。最終的には医療者が判断せざるを得ない場面が多いことを考えると、その時に医療者だけの価値観で決めるのではなく、患者がどう考えるかを推定できる情報があると良い。3) 治療が苦痛になっていることもあるのではないかと感じることもある。治療の継続だけが選択肢ではないが、判断やタイミングが難しい。4) 家族の状況も理解した上で、患者の治療方針を決めた方が良い。退院後の患者本人の生活を考える上でも、家族の生活も考慮したい。5) 一時的に治療に関わる場合には、それまで地域で関わっていた医師や専門職から情報収集したいと思うが、時々うまくいかないこともある。6) 治療の継続や緩和への切り替えの判断が難しい。事前に本人や家族から話を聞いていけばスムーズに移行できる、の 6 点が挙げられた。

以上の結果から、医療者にジレンマを生じさせる状況を前提にして、現在患者で治療選択に迷いがある人、いずれ患者になる可能性がある人、そしてその人を支える家族に向けて、考えるヒントを提供するためのパンフレットを作成した。



成果物紹介

Project Outputs

掲載プロジェクトの成果物の一部です。今後さらに多くの成果物の刊行が予定されていますのでトヨタ財団ウェブサイトで紹介していきます。
Many more are expected to follow and will be introduced in the Toyota Foundation website.
<https://www.toyotafound.or.jp/>



D16-R-0176
鈴木 愛
Ai Suzuki

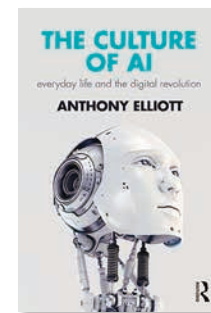
Website
一般社団法人 Wildlife Conservation in Asian Landscape (<https://www.wilcola.org/>)



D16-R-0243
エヴァン・エリース・イーストン - カラブリア
Evan Elise Easton-Calabria
Booklet
Syrian refugee-led organisations in Berlin



D16-R-0238
山田 智恵里
Chieri Yamada
Booklet
ズーンバヤン 防災冊子
—あなたのために—



D16-R-0242
アンソニー・エリオット
Anthony Elliott
Book
The Culture of AI:
Everyday Life and
the Digital Revolution



D16-R-0320
牧野 冬生
Fuyuki Makino

Website
4 awalk cambodia
(<http://cambodia.4awalk.com/eng/>)



D16-R-0341
高村 加珠恵
Kazue Takamura
Policy Brief
Human Rights of
Non-Status Migrants
in Japan



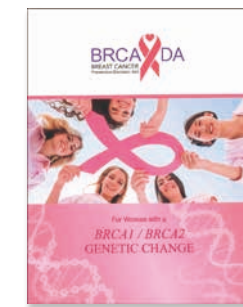
D16-R-0256
当山 昌直
Masanao Toyama
Monograph
消失の危機にある琉球の
生物文化の記録保存から
「生物文化遺産」創出の道を開く



D16-R-0286
中山 幹康
Mikiyasu Nakayama
Journal
Journal of Disaster
Research Vol.14 No.9
Dec.2019



D16-R-0344
澤崎 賢一
Kenichi Sawazaki
Website
暮らしのモンタージュ
Living Montage
(https://www.youtube.com/channel/UCp0PrWxAjE7xxNqIH yVPH_w?view_as=subscriber)



D16-R-0408
ヨ一・カー・シー
Yeoh Kar See
Booklet
BRACADA BREAST CANCER
Prevention Decision Aid



D16-R-0404
木村 豊
Yutaka Kimura
Exhibition
写真・映像展示
「日常へのまなざし
—昭和20年代、進駐軍が
見た日本の街角」



D16-R-0611
由井 秀樹
Hideki Yui
Monograph
母子保健史の間隙
～母子保健は人々に何を
もたらしてきたか～



D16-R-0576
平山 亮
Ryo Hirayama
Booklet
ケアマネジャーの皆さんへ：
性的マイノリティの利用者
さんを担当するとき知っ
ておいてほしいこと



D16-R-0820
島田 千穂
Chiho Shimada
Booklet
これからの治療選択に
迷っている人と
その家族の方へ



報告書概要集 2019年

Project Reports 2019

公益財団法人 トヨタ財団
The Toyota Foundation

研究助成プログラム
Research Grant Program

デザイン・印刷 株式会社アドプラッツ
Designed and Printed by AdPlatz.